

令和5年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における  
障害者等による  
文化芸術活動を  
促進させるための  
コア人材形成を  
軸とした基盤づくり  
事業：リサーチ

報告書

HAPS



令和5年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における  
障害者等による  
文化芸術活動を  
促進させるための  
コア人材形成を  
軸とした基盤づくり  
事業：リサーチ

報告書

## はじめに

一般社団法人 HAPS が令和 4 年度よりはじめた「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」の 2 年目となります。非常にやりがいのある取り組みを継続できることを、代表として大変うれしく思っています。

HAPS は若手芸術家支援の団体として 2011 年に発足しました。ここでいう「若手」とはエスタブリッシュされていないという意味であり、社会的な認知や商業的な成功を得られていないアーティストたちのことでした。彼ら彼女らをサポートすべく居住・制作・発表の場づくり事業として HAPS はこれまで様々な広い意味での表現者サポートをすること、あるいは表現自体を擁護することに邁進してきました。決して狭い意味での現代美術的なものではなく、システムからこぼれ落ちてしまうものをいかに丁寧に掬い取っていくのか。そのような試行錯誤の日々が現在の HAPS をかたちづくってきたと言えます。

この報告書で提示される、障害のある方の表現をめぐる美術館の諸問題は、これまでの HAPS の方向性の延長線上にあると言えるかもしれません。作品とは、芸術とは、表現とは何か、という問いが、そもそも人間とは何かという根源的な問いと響き合う。その響音の中に美術館を置いてみる。そこにおいてさまざまな共有と協働が開き、実を結ぶことを強く期待しています。

一般社団法人代表理事 遠藤水城

003 | はじめに  
文：遠藤水城

006 | 令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業  
「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」について  
文：中川眞

008 | リサーチ概要  
文：中西美穂

015 | リサーチ 13～20 レポート  
文・構成：中西美穂

016 | リサーチ 13  
国立国際美術館

1. 国立の美術館
2. 手段によらない考え方からプログラムを組み立てる
3. 話すことが目的ではない、いろいろな会話が生まれる
4. 《ヤナイハラI》鑑賞ワークショップの広報・準備、当日の様子など
5. どの人にも響かないプログラムになってしまっているんじゃないか
6. 現代美術とは何かというところから、話していく必要もある
7. いま、目の前にいる人だけが対象じゃない

026 | リサーチ 14  
京都市京セラ美術館

1. 日本で2番目に長い歴史を持つ公立美術館
2. リニューアルで改善したこと
3. 市民が主体となる障害者等にかかる文化芸術活動の受け入れ
4. 談話室の新設
5. ほよよんタイム
6. 最近の障害者等の文化芸術活動との関り

034 | リサーチ 15  
京都国立近代美術館

1. 教育普及室
2. 新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業「感覚をひらく」をはじめ
3. 見えない方も企画側に入るABCプロジェクト
4. アーティストがつくる触図の表現
5. 地域の文化施設との連携事業CONNECT
6. 研究会「ひらくラボ」

042 | リサーチ 16  
滋賀県立美術館

1. “みかた”の多い美術館展
2. サポート型な監視員さん
3. 県立近代美術館から県立美術館へ
4. 作品収集の一つの方針としてのアール・ブリュット
5. 県の文化政策として
6. さまざまな触図が紹介された常設展
7. 民間ミュージアムの経験

050 | リサーチ 17  
八戸市美術館

1. 100年後への美術館
2. 手話付きガイドツアーをはじめるきっかけ
3. 美しいHUG！手話付きガイドツアー
4. 社会福祉施設への作業依頼
5. アートファーマー
7. 行政・学校・市民との連携の中で

058 | リサーチ 18  
十和田市現代美術館

1. アートでまちづくり
2. 建築と一体化した常設展
3. 観光推進拠点としての美術館
4. 百瀬文「口を寄せる」展の鑑賞ツール
5. 百瀬文「口を寄せる」展の企画理由と耳の聞こえない方とのつながり
6. 地域へ+聴覚に障害がある方との鑑賞会

064 | リサーチ 19  
一宮市三岸節子記念美術館

1. 小規模ミュージアム
2. 『さわるアートブック』の連携館
3. 障害がある方たちの展覧会と鑑賞の受け入れ
4. 授乳室設置と赤ちゃん鑑賞会
5. 北海道とのネットワーク
6. 画家制作時の年齢をキャプションに書くことで

070 | リサーチ 20  
広島市現代美術館

1. 公立館初の現代美術専門美術館
2. 改修工事による展示室内エレベーター設置
3. コレクション展示の高さのセンターを低く、子どもにも見やすく
4. アートナビゲーターともに研修機会創出
5. 対話しながら見る、いどばた鑑賞会
6. 地区・地域連携
7. 30年の中での障害者等の文化芸術活動にかかわること

# 令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業

## 「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」について

文：中川眞

本報告書は上記事業のなかのリサーチ部門の報告書である。リサーチャーが8ヶ所の国公立美術館を訪問し、担当者にインタビューしながら実施した質的調査のレポート集である。

本事業全体の目的は、全国の（国立を含む）公立美術館における障害者等の文化芸術活動を大きく推進させるために必要な人材を育成するとともに、モデルとなる美術館でのトライアル事業の企画を行い、それら知見を全国の美術館関係者・利用者と共有することにある。この報告集も多くの関係者に届くことを願っている。令和5年度には、リサーチ以外にカンファレンス、パイロット〔モデル〕事業、未来の美術館構想講座、アーカイブというプログラムを実施した。

障害者等の文化芸術活動の活性化については、さまざまなアプローチが可能であるが、私たちは多くの人を集めるイベント型の事業ではなく、美術館のあり方などを原点から問おうとする、ある意味で地味な取り組みを行なっている。本事業での実験的な取り組みや先鋭的な議論が、やがて全国に行き渡ることを期待している。結果として、公立美術館が美術作品を鑑賞・收藏するだけでなく、障害等を含む多様な属性を持つ市民が美術館をより身近なものとして利活用し、障害者等に関わる企画・展示・所蔵・アウト（&イン）リーチが活発となって、共生社会実現のための象徴空間になることをめざしている。

この事業を計画する背景としては、我が国では福祉系の施設や民間のアートセクターによる障害者等の芸術の発信が盛んであるのに比べて、公立美術館における取り組みが、世田谷美術館や滋賀県立美術館といった幾つかの例を除いて、特に展覧会という側面ではあまり活発であるとはいえない状況がある。その要因としては学芸員の価値観・経験値の問題もさることながら、美術館という組織のもつ構造的な問題もあるだろう。本事業は、それを草の根的、ボトムアップ的な側面から働きかけようというものである。

精神科医のプリンツホルンの『精神病者の芸術性』（1922）、デュビュッフェによるアール・ブリュットのコレクション公開（1947）、ロジャー・カーディナルによるアウトサイダー・アートの命名（1972）などによって、欧米では社会の中で周縁化されたアーティストの表現が新たな芸術領域として立ち上がり、美術館への收藏も体系的に実施されている。しかし我が国では1960年代から福祉施設などにおいて個別に取り組みされてきたが、公的な美術館での展示は、20世紀では「開館記念展 芸術と素朴」（1986 世田谷美術館）や「パラレル・ヴィジョン」

展（1993 同）、「エイブル・アート '99 このアートで元気になる」（1999 東京都美術館）など数えられるほどである。また公立美術館での障害者による作品の所蔵は微々たるものである。日本最大のコレクションは滋賀県立美術館の731件であるが、これは2023年に日本財団から550件の寄贈によって一気に拡大したのであり、民間のみずのき美術館（亀岡市）の2万点やたんぼぼの家（奈良市）の数千点に比べると圧倒的に少ない。

一方、国の制度「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」（2018、障害者文化芸術推進法）や、アクセシビリティ改善に関しては追い風となる「合理的配慮」が事業所などにおいて法的義務となる「改正障害者差別解消法」（2024）の施行など、制度的な位置づけが徐々に整えられ、特に2021年の東京オリンピック・パラリンピックに際しては、スポーツとともに文化芸術に大きな予算が投じられた。しかしそのレガシーが政策的に公立美術館に移譲されたという状況にはなく、せっかくの機運や潮流が尻すぼみしてしまう懸念がある。

以上のような問題意識のもと、リサーチャーは美術館にて調査をしてきたのであるが、企画系よりも教育普及系のセクションにおいて工夫を凝らした取り組みが展開されているのが印象的であった。館によっては規模、予算も異なることから、それに応じた内容になっているのは当然である。

また対象が障害者だけでなく、高齢者、子ども、外国人など、多岐に亘っている。目を凝らすと、美術館に来にくい人々が多くいるということなのである。

また企画系と教育普及系は、どちらかというと別々に機能しているイメージがあるが、一例を挙げれば、京都国立近代美術館における視覚障害者のアクセシビリティに関する長年の取り組みが徐々に広がりをもち、令和5年の「チョウの軌跡——長谷川三郎のイリュージョン」という展示へと結実したのは見事であった。企画と教育普及が断絶することなくうまく組み合わせられ、新たな協働へとつながっているのは興味深い。このような創造的で新しい動きに各館で触れることができたのは、大きな喜びであった。

最後になるが、昨年の報告集と今年の分を合わせて、今秋には単行本として出版の予定である。私たちの感謝の徴として、丁寧に対応して下さった学芸員の方々と美術館に捧げたいと思う。

# リサーチ概要

文：中西美穂

このリサーチは、文化庁と一般社団法人 HAPS が主催する「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」の一部門であり「公立美術館を中心に、障害者等の関わる文化芸術活動に関する質的な調査を行う。美術館で実施される障害者等の関わる文化芸術活動の企画・運営にあたる有益な情報をまとめ、一部を公開する」ことを目的としている。

調査対象となる公立美術館の選定は、一般社団法人 HAPS による事前調査をもとに、調査者の合議で決定した。各館の調査対象者は一部を除き、各館の代表連絡先に電話あるいはメールにて当調査の主旨を説明し適任者の紹介をお願いした。調査においては、一般社団法人 HAPS より、調査者を含む 1～2 名が各館を訪問し、対面で約 90 分間インタビューを行った。

公開する調査内容については、インタビューをもとに 5000 字程度のレポートにまとめた。なおレポートにおける専門用語と範囲については以下の通りとした。

(1) 「障害者等の芸術活動」については、障害者アート、障害者美術、アール・ブリュット、アウトサイダーアート、エイブルアート等、日本語においてさまざまな「名づけ」がある。調査全体で統一せず、訪問インタビュー時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。

(2) 「障害者」という言葉においても「障害がある人」「当事者」「目が見えない人」「視覚障害者」「車椅子ユーザー」「発達障害」など、その状況や立場において様々な言い方がある。調査全体で統一せず、訪問インタビュー時の言葉を尊重しながら、各館と調整して用いる。

(3) 従来は直接的に「障害者等の芸術活動」に関わるとされない「共生社会」や「社会包摂」において対象範囲となる高齢者や外国人等に関わる取り組みは、アクセシビリティや表現の位置づけ等において「障害者等の芸術活動」と課題を共有しうると考え、調査全体で統一した書き方はしないが、インタビュー時の対話を尊重しながら、各館と調整し可能な限り記述する。

また、【概要資料 1】として概要一覧となる「2023 年度 調査館、調査日、調査者等一覧」、【概要資料 2】として調査時に各館に示した「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」にか

かる調査へのご協力のお願ひ」、【概要資料 3】として「2023 年度文化庁調査事業リサーチ質問概要（2023 年 9 月更新）」を、【概要資料 4】として昨年令和 4 年度の訪問調査リストを以下に添付する。

## 概要資料 1

2023 年度 調査館、調査日、調査者等一覧

調査館名（訪問順）		
館名	訪問日	調査者等
国立国際美術館	2023 年 9 月 21 日（木）	中川、中西
京都市京セラ美術館	2023 年 10 月 19 日（木）	中川、中西
京都国立近代美術館	2023 年 10 月 20 日（金）	中川、中西
滋賀県立美術館	2023 年 10 月 23 日（月）	中川、中西
八戸市美術館	2023 年 11 月 8 日（水）	中川、中西
十和田市現代美術館	2023 年 11 月 9 日（木）	中川、中西
一宮市三岸節子記念美術館	2023 年 11 月 30 日（木）	中西
広島市現代美術館	2023 年 12 月 1 日（金）	中川、中西

調査者名（五十音順）	
名前	
中川 眞	大阪公立大学特任教授 一般社団法人 HAPS 文化庁事業 監修
中西 美穂	大阪人間科学大学非常勤講師 一般社団法人 HAPS コーディネータ／リサーチャー

# HAPS

東山 アーティスト・プレースメント・サービス  
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339  
TEL 075-525-7525 FAX 075-525-7522 E-MAIL info@haps-kyoto.com URL http://haps-kyoto.com

2023年10月吉日

様

「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ」にかかる調査へのご協力をお願い

一般社団法人HAPS（※）では、令和5年度「障害者等による文化芸術活動推進事業」を文化庁より受託し、「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業」に取り組むことになりました。

本事業は、障害者等の関わる文化芸術活動（発表、鑑賞）に関する多面的な手法を大きく発展させ、積極的に活動に取り組めるようになるために、公立美術館の学芸員、教育・普及担当員等の職員、アーティスト、現代美術のキュレーターらとともにその基盤を作ることを目的としています。

事業の一環で行う「リサーチ」では、障害者等の関わる文化芸術活動について公立美術館を中心にヒアリングを依頼し、美術館で行われてきた障害のある人々との取り組み、企画、運営についての情報をまとめ、広く共有することを目指しています。

このたび貴館にリサーチのご協力をお願いしたく、ご検討のほどよろしくお願いいたします。

※HAPSは、京都市による「京都文化芸術都市創生計画」において計画された「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり事業」を主たる業務とする団体として、2011年に設立いたしました（2019年に事務局を法人化）。芸術家支援を軸に、広く、京都市内や社会における豊かな創造性の循環を作り出すことを目標に、活動を重ねてまいりました。2017年からは、そうした取り組みを広げ、文化芸術の力を活用して、多様な背景を持つ人々が、共に生きることのできる社会のあり方を探り、その仕組みづくりを目指す事業（「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」）を実施しております。

# HAPS

東山 アーティスト・プレースメント・サービス  
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339  
TEL 075-525-7525 FAX 075-525-7522 E-MAIL info@haps-kyoto.com URL http://haps-kyoto.com

## 【リサーチ概要】

### 調査の目的

公立美術館を中心に、障害者等の関わる文化芸術活動に関する質的な調査を行う。美術館で実施される障害者等の関わる文化芸術活動の企画・運営にあたる情報をまとめ、一部を公開する。

### 調査の方法

- ・調査員および事業担当者が貴館へ訪問し、約90分間ヒアリングを行います。
- ・内容は録音し、文字起こし等を行った上でまとめます。記録のための写真撮影を行います。録画はしません。

### 調査の報告

- ・ヒアリング内容を調査員が5000字程度にまとめ、事業ウェブサイトにて一般公開します。
- ・公開前に、ヒアリング協力者に内容確認をお願いし、修正等を行ったものを公開します。

### データの取り扱い

- ・インタビュー録音として取得したデータや個人情報は、調査目的以外には使用しません。この保管データは、調査が終了してから5年後までに破棄します。

リサーチについて何かご不明な点がありましたら遠慮なくお尋ねください。  
本調査へのご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

### 【本調査監修】

中川 眞（大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授）

### 【主催・問い合わせ先】

一般社団法人 HAPS  
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339  
TEL 075-525-7525 Fax 075-525-7522

2022年度文化庁調査事業リサーチ質問概要（2023年8月5日更新）

インタビューは、状況に応じてゆるやかに進行致します。

時間が許すならば質問に直接かわからないことも含め、さまざまにお話を伺いたく思います。

1. こちらからの調査主旨説明

2. お話しいただく方について（後日確認でもよい）

①お名前、②ご所属、③役職（常勤、非常勤）、④勤務年数、⑤障害者等による文化芸術活動に関する教育・研究の有無

3. 館について（後日確認でもよい）

①正式名称、②設置年、③設置にかかる条例、計画等、④運営主体、⑤昨年度決算、⑥職員数（うち学芸員数）

【ここより一問一答でなく、可能ならば対話的にすすめる】

※お話しいただいた全てを公表するわけではありません。公表前に必ず確認します。

4. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について①

・具体事例やエピソードをお願いします。必ずしも全てに解答する必要はありません。  
鑑賞機会に関すること、創造機会に関すること、作品発表の場に関すること  
館企画の展覧会に関すること、所蔵作品に関すること、交流促進に関すること  
窓口（相談含む）に関すること、人材の育成に関すること、情報の収集に関すること

5. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について②

上記のうちで特に館の特徴・強み・唯一の出来事だと思えることは何ですか？複数でも、また、ここにはない項目でも可能です。

6. 館における障害者等の関わる文化芸術活動について③

現在、課題だと感じていることはありますか？

7. 館に限らず、「公立美術館における障害者等の関わる文化芸術活動」についてお話しをしていただけること（情報、疑問、課題、可能性、その他）があればお願いします。

8. その他、調査について質問があればお願いします。

以上

令和4年度リサーチ

- リサーチ 01 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
- リサーチ 02 徳島県立近代美術館
- リサーチ 03 三重県立美術館
- リサーチ 04 福岡アジア美術館
- リサーチ 05 福岡市美術館
- リサーチ 06 兵庫県立美術館
- リサーチ 07 茅ヶ崎市美術館
- リサーチ 08 新潟市美術館
- リサーチ 09 世田谷美術館
- リサーチ 10 東京都美術館
- リサーチ 11 金沢 21 世紀美術館
- リサーチ 12 長野県立美術館



令和4年度  
障害者等による  
文化芸術活動推進事業公立美術館における  
障害者等による文化芸術活動を促進させるための  
コア人材のコミュニティ形成を  
軸とした基盤づくり事業：  
リサーチ報告書

発行日 2023年3月31日  
発行元 一般社団法人 HAPS  
執筆 中西美穂、福島尚子、中川眞  
編集 中西美穂、藏原藍子  
アートディレクション、デザイン 山本洋明  
リサーチチーム 藏原藍子、中川眞、中西美穂、  
福島尚子

## リサーチ 13 ~ 20 レポート

文・構成：中西美穂

※文中の文字表記等は、各館との合意を尊重しており、全体として統一していない部分があります。

# 国立 国際美術館

都会の高層ビルの合間から大きな銀色の羽のような構造体が見える。それが展示空間を地下に広げる国立国際美術館の入り口である。周辺には大阪市立科学館や大阪中之島美術館をはじめ、文化施設が点在する。同館主任研究員・教育普及室長の藤吉祐子さん（注 13-1）（以降、藤吉さん）にお話をうかがった。

## 1. 国立の美術館

国立国際美術館は、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会に際して建設された万国博美術館を活用し、大阪府吹田市の万博記念公園内に1977年に国内外の現代美術を中心とした作品を収集・保管・展示し、関連する調査及び事業を行うために開館した。施設の老朽化などの問題があり2004年に大阪市内の中之島西部地区に新築、移転。同年11月の移転開館前7月に、同館初めての教育普及専任の研究員として藤吉さんは着任した。以来10年近く一人で教育普及を担当してきたが、2013年度に教育普及専任の研究補佐員1名、2020年度に特定研究員1名、2022年度に任期付研究員1名と、教育普及専任スタッフが増員し、2023年度現在、教育普及室長である藤吉さんも含め4名の専任スタッフが教育普及を担当している。同館全職員数は35名（非常勤の職員を含む）、うち学芸課に21名が所属し、教育普及担当が4名。全学芸課スタッフの5分の1

住所 大阪市北区中之島 4-2-55  
〒530-0005  
電話 06-6447-4680  
ファックス 06-6447-4699  
URL <https://www.nmao.go.jp/>

弱が教育普及専任の体制といえる。

同館の正式名称は、独立行政法人国立美術館国立国際美術館。運営主体は独立行政法人国立美術館法（平成十一年法律第百七十七号、平成十三（2001）年一月六日から施行）に基づく、独立行政法人国立美術館である。その独立行政法人国立美術館は、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館7館の運営と、2022年度に発足した国立アトリサーチセンターを有する、政府が資本金を出資する法人である。8施設のうち5館は東京都内にあり、3館はそれぞれ金沢、京都、そして大阪のここ国立国際美術館となる。同法人の教育普及に関する取り組みとしては、おおむね年に一回、美術を専門とする5館が集まり教員、学芸員や指導主事も対象とする研修会が行われ、また2022年度末に立ち上がった国立アトリサーチセンターではラーニンググループが設置され特化した研究をすすめている。

## 2. 手段によらない考え方からプログラムを組み立てる

藤吉さんは、各地の美術館で行われていた「視覚障害を持っている人を対象にした鑑賞プログラム」や「視覚障害者向けの鑑賞に限らないプログラム」などの情報を集めたり、参加する中で、当時（2018年くらい）は、「触るか、触らないか」「対話するか、しないか」と、どちらかの方法を選んで実施する企画が多いように感じていた鑑賞プ

ログラムにおいては「どのような作品を見るか」「どういう目的ですか」によって方法も変わると考えていたため、手段を最初に決めていることに“もやもや”していた。美学者の伊藤亜紗さん（注 13-2）の著書を読み、伊藤さんの手段によらない考え方に興味を持った。最初に「触るか・触らないか」「対話するか・対話しないか」などの手段を決めるのではない、視覚障害者のプログラムを組み立てる手掛かりになると考えたからだ。

2019年度の同館のワークショップに、伊藤さんを講師に招いた。鑑賞する作品は20世紀のフランスで活動した彫刻家アルベルト・ジャコメッティが、友人の矢内原伊作をモデルとしたブロンズ彫刻《ヤナイハラI》とした。同作品は2018年の同館に新収蔵されたため、所蔵を記念する特集展が2019年度に計画されていた。同館では、その当時、コレクション展が年に4回展示替えされ、その都度展示される作品は変わる。そういった中で、通年で展示されることが決まっていた《ヤナイハラI》の存在は、企画を考える上で、大きかった。プログラム企画段階で、伊藤さんより「彫刻作品の鑑賞なので、話すだけでなく触ることもできればいいけれども、ジャコメッティの作品には触れないから、触るためのレプリカをつくることはできないか」と提案があった。予算も確保できたためレプリカをつくり、それを活用したワークショップを開催することとした。

### 3. 話すことが目的ではない、いろんな会話が生まれる

2019年11月2日(土)と12月7日(土)の二日間にわたる、国立国際美術館 視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ「見れば見るほど見えなくなる ジャコモメッティ《ヤナイハラI》を徹底的に鑑賞しよう」は、同館講堂と地下2階展示室で開催された。高校生以上の見えない／見えにくい人6名、見える人6名を参加者として公募し、定員数が集まった。当日はレプリカを会場の真ん中に置き、見える人と見えない人3～4名程度のグループで一つの《ヤナイハラI》を模した塑像制作する。参加者に付き添うガイドヘルパーにも、介助するだけでなく、ワークショップに参加してもらった。

ジャコモメッティの作風の典型は、人体を細長くのばしたような造形である。藤吉さんは教育普及の研究者として「典型的なジャコモメッティの作品ならば、やりづらかっただろう。摸造したときに、なんとなくひきのばしたような造形になって、それだけで終わる。しかしこの《ヤナイハラI》は、一般的によく目にするジャコモメッティの彫刻とは異なり、モデル本人にわりと近い顔や髪型の造詣があり、しかし首から下は、本来のジャコモメッティの指型がのこるような、つくりかけのような胸像」であると鑑賞対象とする作品について観察していた。参加者には、具象的な顔や髪型の部分と、指型が残る部分の両方を触り比較してもらった。手触りも見た目も異なる表現に参加者から「どうしてだろう」と問いが生まれた。おたがいに感じたことを話す、つくるために話

す。スケッチと同じで、上手く描けない、ここでは上手くつけれない時は十分に見えない。見える人見えない人にかかわらず、何度も戻って《ヤナイハラI》を鑑賞する。気づいたことをお互いが話し合う。対話による鑑賞だと「さあ、話しましょう」と、話すことが目的になってしまい、無理やり会話をつくりだすことがある。しかし、このプログラムでは「つくるってことがあるからこそ、いろんな会話が生まれた。非常に面白く、狙い通りの内容となった。」とのことであった。【図13-1】

### 4. 《ヤナイハラI》鑑賞ワークショップの広報・準備、当日の様子など

藤吉さんは見えない人たちへの聞き取りから、見えない人は、美術館のウェブサイトに掲載されている参加プログラムを探すことはあまりないようだとの気づきがあった。見えない人への鑑賞環境がある徳島県立近代美術館や三重県立美術館の展覧会情報は調べるが、ワークショップのようなプログラムをホームページで探すことはほとんどなく、多くの場合はメーリングリストなどのネットワークを介し、情報を受け取っている。国立国際美術館は、神戸アイライト協会を中心に毎回情報提供し、そこから情報を広げてもらっているとのこと。また、参加者は一人で来る人もいれば、ガイドヘルパーさんと来る人や、友達と一緒に申し込む人もいる。今回のワークショップ参加者たちは、他館の活動経験があっても、国立国際美術館でのプログラム参加は初めてで



【図13-1】国立国際美術館 視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ「見れば見るほど見えなくなる ジャコモメッティ《ヤナイハラI》を徹底的に鑑賞しよう」実施風景 提供：国立国際美術館

あり、会場になれていなかったという。なお美術館そのものに初めて来たという参加者について来た人もいた。

ワークショップでは彫刻家の小田原のどかさんを実技の特別講師に招き、100キロの粘土の塊を用意し、三脚のような彫塑回転台を使うという、本格的な塑像をおこなった。

支柱となる木に縄を巻き、粘土をちぎって塊をつけたり剥がしたりという彫塑の作業は、見える人にも、見えない人にも新鮮であったという。グループでの摸造においては、見える見えない関係なく、徐々に「わたし顔をつくりたいわ」とか「下をつくりたいわ」と役割分担が決まっていっていた。見える人が顔をつくるわけでもない。一つのを、完成するために、その人たちの

好きなことを自然に分担しながら行っていたようであった。出来上がった塑像が、本物によく似ているかどうかは終着点ではない。3つのグループで、まったく違う塑像ができた。耳にこだわっていたグループは、すごく耳をきれいにつくっていた。それはそのグループの鑑賞のありかたである。見えている人たちの一般的な鑑賞と同じで、どこに着目しているのかは、三者三様にあらわれる。

藤吉さんは、このワークショップをきっかけに、見えない人たちと本格的に出会ったという。視覚に障害がある人は、美術館がはじめての人であれば、他の美術館に行ったことがあるという人もいた。見えなくても展覧会をみたいとか、あるいは徐々にみ

えなくなっている人は見えるうちに美術館に来て、美術作品を目に焼き付けておきたい、色を覚えておきたいとの思いがあることも知った。見えない人、見えにくい人も、見える人と同じように、美術館にかかわりたいとか、見たいとか、思っていることを知って、見えない人、見えにくい人も参加できるプログラムを継続していく必要性を感じたという。

#### 5. どの人にも響かないプログラムになってしまっているんじゃないか

その後、本格的に活動しようとした時期にコロナ禍となった。そこでオンライン鑑賞プログラムもはじめた。同時期に見える人と見えない人、学校の先生などに声をかけ、みんなで楽しめるようなツールをつくるための検討会をはじめた。その検討会に参加する視覚障害者から、中途失明の人の中には、触るのが好きじゃない人もいと教えられた。触り方を知らないとか、目が見えていた経験があり触ることに頼りたくないとか、触るより音声が好きなど理由は一つではなかった。先天盲の人たちは支援学校で、触ることからモノを覚え、そこから自分の考えを築いてきた人たちである。そのような見えない人たちからは「モノに基づいて自分が発言できる機会が欲しい」との発言があった。触るモノなど何もない状況で話すと、見える人の話しののっかってしか話せない。その人の発言に対して、質問したり、感想をいったりしかできない。しかしモノを触ることから始めると

「これはツルツルしますね」とか言える。そういうモノが欲しいと言われた。藤吉さんは、いずれの意見も納得できることであり、だから「触る方がいい、触らない方がいい」という話でもないと改めて思った。

いろいろな立場の人の要望を聞きすぎると、目的や目標をどこにすべきか、わからなくなるだろう。例えば視覚障害のある人のプログラム企画においては、先天盲と中途失明、また年齢にもよるだろう。事実確認からはじめると、それがつまらない人もいるだろう。「見える人たちがどう見てるのか知りたい」とか「見える人たちの思いを聞きたい」との意見もある。結論はつかない。

一方で気づかされたことに、見える人以上に、見えない人たちの人間関係は、自分と考えが似ている人と集まりやすい傾向にあるのではないかと、いうことである。鑑賞プログラムを通して、自分とは違うことを話す人がいる、変わった考えの人がいる、といった気づきがあり、けんかまではいかないまでも、少し議論になったとしても、いいんじゃないかと考えるようになった。しかし、来館のために時間をやりくりして、例えばガイドさんを頼んでと、障害がある人たちはかなりのエネルギーを要して来館している。ならば、来館してプログラムに参加したことに満足して帰っていただきたい、また来館したいと思っていただきたいという思いもある。

プログラムを担当してきた藤吉さん、さまざまな参加者の立場を思いやる中立という立場をとることで、どの人にも響かないプログラムになってしまっているんじゃないかと考えてしまうこともあるという。

#### 6. 現代美術とは何かというところから、話していく必要もある

視覚に障害がある人を対象にした毎回の鑑賞プログラムでは、いくつかの作品に絞って話をしたり、ジャコメッティのレプリカに触ったりしている。ある時、活動終了後に少し時間があつたため、鑑賞プログラムに取り上げなかった展示室の作品も一緒に見ることになり、見える人と見えない人がペアになって話しながら展示を見て回った。その時に、視覚障害がある参加者は、プログラムの対象とはなっていなかった国立国際美術館の他の多くの作品をはじめて知ることとなったといえる。展示作品の一つにアーティストの工藤哲巳による、目の玉が鳥かごに入っているなどのような、見る人が見れば、一見気味が悪いとも思われてしまう、コンセプチュアルなオブジェもあった。その展示作品について初めて知った視覚障害がある参加者から、「この美術館にこんなに気持ち悪い作品とか、きれいとは思えない作品が飾っているとは思わなかった」と、どちらかというショックを隠しきれない様子で述べられたという。

見えている人ならば事前の情報もあるし、来た時に展示室全体が見える。これまで、鑑賞プログラムで排除したつもりも隠してきたつもりもなかったが、結果的には、どのようなコレクションを持つ美術館であるかを知ってもらう機会すら設けていなかったことに愕然とした。

毎回、所蔵作品の傾向について触れてからプログラムをスタートすることも時間的に厳しいが、現代美術を展示する美術館と

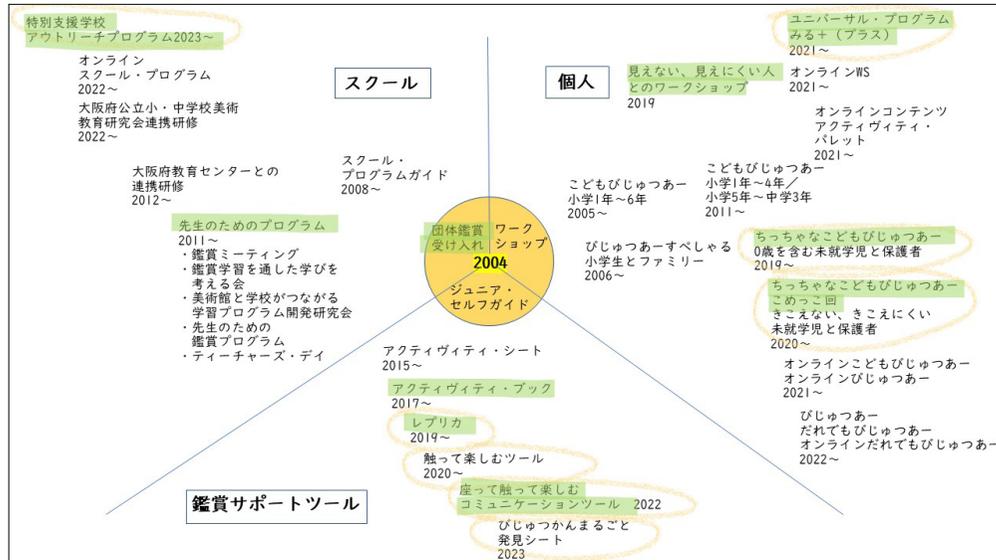
いうことを知らずに参加する人たちに、現代美術についての紹介も必要なのではないかと、藤吉さんは考えるようになったとのことであった。

#### 7. いま、目の前にいる人だけが対象じゃない

鑑賞プログラムは開館時間に実施している。小学生の団体鑑賞を嫌厭する来場者もいる。しかし、そもそも美術館でおしゃべりをしてはいけないのか。会話を控えさせる美術館さえもある。国立国際美術館は、他の来館者への配慮のあるおしゃべりについては制限していない。誰でも来てもいい場所なんだなって認知度を高めていきたいという。

その思いは、コロナ禍に、来場することが簡単ではない人に向けたオンラインプログラムに取り組む中で強くなったという。美術館に来てもらうとか、いま、目の前にいる人だけが対象じゃないんだと考えるようになったそうだ。また、2020年度から教育普及専任スタッフに増員があり、組織的に取り組みやすい体制により、これまで検討中であった活動も推進できるようになった。【図 13-2】

しかし、「誰でも来館していい」「障害を持った人、誰でもきてください」としても、美術館側がそれぞれの対象者への配慮ある準備をしていなければ、プログラムが破綻するだろう。そういうことを、どうしているのか、他の美術館と一緒にフラットに話せる場があればと藤吉さんは思う。例えば、おしゃべりを控えさせる美術館では、作品



【図 13-2】 国立国際美術館教育普及室活動内容（作成：藤吉祐子 2022 年度）

は静かに見るべきであると考え、ある程度同じ価値観を持つ来館者自身が、美術館に関わるはずの多様な人々の排除に加担している可能性があるかもしれない。そのような場合には、美術館はどのような働きかけができるのだろうか。当然、それぞれの楽しみ方は有していてもいいが、ある一定の人たちの楽しみ方だけが尊重されることなく、多様な人たちがそれぞれの立場で美術館と関わっていけるように、美術館が変わっていかないといけないだろうと考える。

同館では最近、外国にルーツを持つ子どもたちにアプローチをはじめた。外国籍住民比率が全国の都市部で最も高い大阪市生野区に拠点をもつ特定非営利活動法人 IKUNO・多文化ふらっとと、意見交換や試験プログラムがはじまった。2023 年夏の鑑賞プログラムでは、日頃大人には見せない

子どもたちの真剣な様子が見られたという。NPO スタッフも、子ども達の美術鑑賞の真剣な姿に驚いたそうだ。美術館に来てはいけなとまでは思っていないだろう。美術館という単語も知っているだろう。しかし美術館に行くという実感がないのではないか。美術館は行く場所だと認知される必要がある。しかし、そもそも興味をもってもらえてないということに気づかされているという。

なお同館では、本調査において障害者等とくられるだろう、ケアを必要とする人たちへのプログラムは、外部の専門性の高い人に協力を仰ぐこともある。教育普及専任スタッフにはない専門性が必要であるからだ。一方で美術館スタッフがすることは手放さない。例えば、見えない人と鑑賞するプログラムでは、対象が見えない人であっても、鑑賞プログラムは教育普及の専門である。

もちろん、有識者にしかわからないこともあるかもしれないが、見えない人と美術館で何ができるかは、美術館のスタッフとして考えていきたい。プログラム企画において、参加者にとってストレスとなるような事項には十分配慮しつつ、何の問題もなく全てがスムーズにいくことが望ましいことでもなく、美術館という場所で、さまざまな人が出会ったときに何が起こるかにも対峙していくことは必要であると考えます。

【感想】

実践の積み重ねが、毎回の取り組みの確かさに繋がっていると思った。また障害がある人等との関りを通して、美術館の存在意義を広げ深めているようにも思え、私たちの調査の一つの方向性を示しているように感じた。

(注 13-1)

「令和 4 年度障害者等による文化芸術活動推進事業：公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材のコミュニティ形成を軸とした基盤づくり事業」(文化庁展一般社団法人 HAPS) カンファレンスプログラム参加者の一人。

(注 13-2)

伊藤亜紗さんは、東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長、リベラルアーツ研究教育教授。伊藤さんのホームページ <https://asaito.com/>

【調査概要】

実施日：2023 年 9 月 21 日 (木)

場所：国立国際美術館 大会議室

【調査対象者】

藤吉祐子 (ふじよしゆうこ)

2004 年より国立国際美術館に勤務。各校種による美術館活動の受け入れ、教職員を対象とした美術館活用プログラム実施、鑑賞サポートツール『アクティビティ・ブック』の制作など、子どもたちと美術の出会いを模索し、スクールプログラムに注力するとともに、きこえない子どもたちも参加する 0 歳からの美術館体験プログラム、視覚だけに頼らずに美術館のアクティビティを楽しむユニバーサルプログラム「みる+ (プラス)」など、さまざまな人たちが、それぞれの立場で、美術や美術館と接点を持ち、美術や美術館、またそこで起こることを楽しむことのできるプログラム開発と実施に努めている。

【参考資料】

伊藤亜紗, 2015 年『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社新書

藤吉祐子, 2023 年「話題提供：国立国際美術館 視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ「見れば見るほど見えなくなる ジャコメッティ《ヤナイハラ I》を徹底的に鑑賞しよう」」京都国立近代美術館 教育普及室・編『令和 4 年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業 (地域課題対応支援事業) 感覚をひらく研究会「ひらくラボ」実施報告書』新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会,

藤吉祐子「美術館が創り出せる場」独立行政法人国立美術館 国立国際美術館『国立国際美術館ニュース』2022.08 246 号

独立行政法人国立美術館 ホームページ <https://www.artmuseums.go.jp/>

特定非営利活動法人 IKUNO・多文化共生ふらっと ホームページ <https://www.ikunotabunkaflat.org/>

# 京都市 京セラ 美術館

平安神宮の朱色の大鳥居の東側、東山を背景にする京都市京セラ美術館は、2023年に開館90周年を迎えた。学芸係長の後藤結美子さん（以降、後藤さん）にお話をうかがった。

## 1. 日本で2番目に長い歴史を持つ公立美術館

京都市京セラ美術館は、昭和3（1928）年に当時の京都市長を発起人とし、昭和天皇の即位を祝う大礼奉祝会の記念事業として新美術館建設が決定され1933年に開館した。日本の公立美術館としては1926年開館の東京都美術館に次いで2番目の開館である。開館80周年の2014年に「京都市美術館将来構想」が策定され、大規模改修を経て2020年にリニューアルオープンをした。名称も、1933年に大礼記念京都美術館から京都市美術館に改称し、そして現在はネーミングライツ契約により京都市京セラ美術館の通称を得ている。建物としては1946年から1952年にかけて京都の駐留米軍に本館を接収された。近年の大規模改修においても開館当時の建物の面影を残している。東京都美術館は1975年に新館となったことを考えれば、現存する公立の美術館建築として京都市京セラ美術館は日本で1番長い歴史を持つ。

住所 京都市左京区岡崎円勝寺町 124  
〒606-8344  
電話 075-771-4334  
ファックス 075-761-0444  
URL <https://kyotocity-kyocera-museum/>

## 2. リニューアルで改善したこと

同館は歴史ある古い建築だということもあり、リニューアル前は、一部の部屋へのアクセスが階段のみであるなど、車椅子ユーザーや足の不自由な方の対応に課題があった。しかしリニューアルに伴う大規模改修の際に、車椅子導線の改善、段差の解消を行った。また、同時に視覚障害者用の手すりや点字ブロックを敷設した。特に美術館の敷地外の通りからメインエントランスに向かう屋外スロープは利用者が手すりを伝いながら入り口近くまで入場できるようにした。【図14-1】

また館内のチケット売り場などにも点字ブロックを敷設し、障害者用の駐車場を設

置し、お手洗いやユニバーサル対応のものを設置した。このように大規模改修の際に、建築面でさまざまな合理的配慮が可能となった。しかし、ユニバーサルトイレが各所に1つ、優先駐車場も2つしかないなど、多人数の訪問が予想される団体への対応を考えれば、さらなる改善が今後も必要であろうとのことであった。

## 3. 市民が主体となる障害者等にかかる文化芸術活動の受け入れ

同館はリニューアル以前から、いくつかの市民が主体となる障害者等にかかる文化



【図14-1】京都市京セラ美術館 外観 撮影：来田猛

芸術活動を受け入れてきた。後藤さんより3つの事例をうかがった。

一つ目は、京都市美術館の貸し展示室を利用して、1981年に「土と色 ちえおくれの世界」としてはじまり、ほぼ毎年開催され、2006年より「土と色 ひびきあう世界」展に名称変更した展覧会である。現在は10近い施設の合同展になっている。焼き物の産地である滋賀県の信楽が近いこともあり、当初は焼き物の作品が多かった（注14-1）が、最近では絵画など多様なジャンルの作品を展示しているという。同展は障害者の芸術活動が現在ほど注目されていなかった80年代初めより、障害がある人達が創作する作品の展覧会を美術館で開催していた。（注14-2）

二つ目は、京都在住の全盲のアーティスト光島貴之さんがかかわる「ミュージアム・アクセス・ビュー」である。2002年に正式発足し2022年8月までの20年間、関西を中心に、美術館やギャラリー等で、目が見えない・見えにくい人と、見える人が、共に美術を楽しむための活動をしてきた。（注14-3）このミュージアム・アクセス・ビューのグループ鑑賞は、同館のコレクション展を中心に何度も開催された。同館学芸員が直接関わることはなかったが、鑑賞活動を見かけたことがあるという。1つの作品の前で、長時間、活発に議論されている様子を後藤さんは覚えているという。目が見える方が説明などをするつなぎ役になり、それを起点に目が見えない方が、作品の意味などを探していく様子に「美術とは目に見えているものだけじゃないんだな」と、感じていたという。

三つ目は、「手で触れる日展」である。日展は日本で最も古い歴史を持ち権威もある美術団体展である。各地の主要な美術館を巡回する日展の京都展の際に、彫刻部門の展示室において、視覚障害者を対象とした「手で触れる日展」がほぼ毎年実施されてきた。2023年12月で第32回目となる。彫刻家の木代喜司さん、谷口淳一さんが中心となり、同展会場の美術家らがボランティアで運営している。木代・谷口の両氏は、京都教育大学の美術領域の教員経験があることから、教育大学生らも加わり、京都府の視覚障害者協会の協力のもと、近年は参加者も含め総勢30人ほどで実施しているという。（注14-4）

以上のように同館は、障害者等の文化芸術活動が注目される以前より、市民が主体的となるそれらの活動を受け入れていた。

#### 4. 談話室の新設

同館リニューアルの際に、2階建ての同館の1階から2階にあがる東側階段すぐの、展示室ではなかった空間を談話室とした。1970年代から1980年代中頃までは喫茶室、その後はバックヤードとして機材置き場となっていた。また一部を仕切り監視員さんなどアルバイトの控室として活用していた時期もある。この空間を、リニューアルにあたって、親しみがあり誰でも気軽に出入りでき、展覧会と直接は結びつかない、来館者がゆっくりくつろげる、ラーニングの拠点として整備した。

ここは障害者等の文化芸術活動にかかる

アプローチの拠点にもなる。たとえば、誰でもいつでも使える筆談ボードを置いている。また、美術館の最寄り京都市地下鉄・東山駅から美術館までの周辺案内も含む触地図と、館内の触地図も置いている。この触地図は、同館1階の総合案内と、館外である市内の視覚障害者福祉施設の京都ライトハウスにも置いている。

ワークショップの会場にもなるが、通常は誰でも自由に使える場として開放している。アーティストの小山田徹さんに制作依頼したカラフルな椅子《トリドリ・スツール》や、同館が所有するソファなど、様々な種類の家具と、同館所蔵作品に関するワークシートがあり、ペンなどつかって自由に楽しむことができる。また絨毯を敷いたコーナーもあり、子どもが寝転がることもできる。

#### 5. ぼよんタイム

新しくスタートしたラーニングは4つのテーマ「パブリック（共創）」「多様性の尊重」「青少年育成」「地域連携」と4つのアプローチ「談話室」「アート・ピクニック」「ダイバーズ・ラボ」「エキシビジョン・クルーズ」をあげている。（注14-5）そのアプローチの一つ「談話室」でテーマを包括するようにゆるやかに実施されているのが、現在はおよそ月1回の頻度で開催している「ぼよんタイム」である。毎回、同館のラーニングスタッフが談話室に常駐する。毎回20名程度の参加があり、リピーターもいる。参加費は無料である。そこで展覧会解説をするのではなく、来館者が立ち寄り、展覧会

の感想を語り合ったり、来館者が持つ情報を残してもらったりする。情報とは、同館のことに限らない、展覧会や作品、そして街をあるいて「見ましたよ」といったさまざまなことである。

また「ぼよんタイム」がない日であっても、談話室には自由に使えるワークシートがあり、美術作品に関するもののみならず、「「なぜ」だと思ふ「もの」や「できごと」を探そう!」といった問いかけのワークシートもある。そこに来館者が足跡を残していくこともある。

来館者同士、職員と来館者がフラットな関係で、美術のみならず京都について気軽におしゃべりできる場や時間として、さまざまな方が参加しやすい環境を目指している。

#### 6. 最近の障害者等の文化芸術活動との関り

同館は、2023年度から「ぼよんタイム」に聴覚障害に対応するための手話通訳士を招いた鑑賞プログラムを試験的に始めた。そこでも、学芸員が一方的に解説するのではなく、参加者の話の輪に入り、作品の感想を聞きあったりする。

そのような活動の中で、車椅子の方にはキャプションの位置が高すぎるとの意見を直接聞くこともできた。アンケートに書いてもらう方法もあるだろうが、同館職員がいる場である方が、一方的なクレームではなく、状況なども含め、対話的に意見を交わすことができる。またリニューアル後は同館が発信する、館の説明動画などに手話



【図14-2】 視覚障害がある方との鑑賞会活動記録動画は、談話室で常時上映されている 撮影：中西美穂 2023年

や字幕をつけるようになった。

2020年より毎年、京都・岡崎公園一帯の美術館や図書館、劇場、動物園などの文化施設等が連携する芸術祭「CONNECT ⇄」に館として参加している。この芸術祭は「障害のあるなしにかかわらず、さまざまな感性、特性を持つ人たちが芸術や文化に気軽にアクセスできるようにすること、参加した人たちがつながり合い、気づきを与え合う場、誰もが一緒に楽しめる場を一緒に作ることを目指す」ものである。シンポジウムや鑑賞プログラムなどに加えて、初年度は、同館のガラス張りのファサードを活用した「ガラス・リボン」を舞台に東京や京都で障害のある人が集うアトリエ活動に参加する三人の作品世界を紹介した。2年目

は有識者に障害者のアートについてうかがったインタビュー映像を制作した。3年目と今回の4年目は視覚障害がある方と一緒にコレクション作品鑑賞を記録映像として公開した。【図14-2】

この「CONNECT ⇄」では準備段階において参加施設が集まり勉強会を重ねている。障害者の方が講師となることもある。またホームページをはじめとするデザインを通して、障害者のある方にも見やすく、わかりやすい情報にあり方を学ぶ機会にもなる。館のみであると、自発的に取り組むことが難しい、美術館に必要な内容を学べる良い機会となっている。

このような障害がある方たちと関わるプログラムは同館では後藤さん（注14-6）と、

委託会社のラーニングスタッフ2名が担当している。

なお、障害がある方たちの活動にかかわる作品の収集については、京都市美術館の方針では区別をしておらず、アール・ブリュットなど障害がある方の創作と分類されていたとしても、アートとして優れていれば所蔵するという回答になるとのことであった。また近年、正規の美術教育を受けておらず独自の表現をしているアーティスト西村一成の作品3点を所蔵した（注14-7）。

#### 【感想】

美術館における障害者等の文化芸術活動は、今日、館の主導が注目されているが、長い歴史を持つ美術館においては、障害がある方自身、あるいは障害がある方たちの鑑賞機会に興味がある一人の市民でもある美術家ら自身によって育まれてきたことに気づかされた。

(注 14-1)

焼き物を創作の中心にすえる活動の背景の一つには 1950 年代半ばに、障害がある子どもを療養するための施設・近江学園に、さまざまな芸術家が集ったことがあるだろう。陶芸家の八木一夫もその一人であり、近江学園の子ども達に焼き物を教え、一緒に制作していた。強制的につくらせるのではなく、あくまでも、自ら土に近寄ってきた子だけを対象にする。近寄ってくるまでは押し付けけないというルールが近江学園にあったそうだ。(インタビュー時の後藤さんと調査者の会話から)

(注 14-2)

「土と色」展については、世田谷市美術館・学芸員の高橋直裕が、障害があるアーティストを紹介する「KALEIDO SCOPE 6 人の個性と表現」展(2003 年)を企画した際に、影響を受けたと記している。[高橋直裕:2003:16]

(注 14-3)

ミュージアム・アクセス・ビュー <http://museum-access-view.cocolog-nifty.com/>

(注 14-4)

京都新聞アート&イベント情報サイト「ことしるべ」には、2020(令和2)年12月20日に開催された第29回「手で触れる日展」が、参加者らのコメントとともに紹介されている。<http://event.kyoto-np.co.jp/feature/nitten.2021/1608436394.5724.html>

(注 14-5)

京都市京セラ美術館のホームページ ラーニング参照。冊子『談話室とラーニング』もここから pdf 版をダウンロードできる。[https://kyotocity-kyocera.museum/learning\\_program](https://kyotocity-kyocera.museum/learning_program)

(注 14-6)

学芸員の後藤さんの理想の一つに「美術館オープンデー」があるとのことであった。日ごろ来

館しにくい方々が優先的に来館する特別な一日である。展示室で気兼ねなく大きな声で話したり、床で寝そべったり、いくつものベビーカーが並び鑑賞したり、子どもが走り回ったり。通常ならば「他の来館者」に迷惑がかかってしまうといったことを、休館日の一日などを使い、様々な方々が楽しんでいただく欲張りな一日とのことである。

(注 14-7)

西村の作品に限らず、正規の美術教育を受けていない表現者も存在する。それらの作品をアール・ブリュットと位置づけるかは、美術館内に留まらない議論が必要であろう。

【調査概要】

実施日：2023 年 10 月 19 日(木)

場所：京都市京セラ美術館 談話室

【調査対象者】

後藤結美子(ごとうゆみこ)

京都市美術館(京都市京セラ美術館)学芸係長。

1997 年より学芸員として同館に勤務。2020 年より現職。2022 年より、文化庁・京都国立近代美術館主催のプロジェクト「CONNECT ㊦」にかかわっている。

【参考資料】

『談話室とラーニング』京都市京セラ美術館,2021 年

京都新聞アート&イベント情報サイト「ことしるべ」2020(令和2)年12月20日:

<http://event.kyoto-np.co.jp/feature/nitten.2021/1608436394.5724.html>

ミュージアム・アクセス・ビューウェブサイト:  
<https://www.nextftp.com/museum-access-view/index.html>

中谷至宏「歴史の意図、明日への企図—京都市美術館の再整備について—」独立行政法人国立美術館 国立国際美術館『国立国際美術館ニュース 238 号』2020 年 9 月

# 京都国立 近代美術館

平安神宮の朱色の大鳥居の西側にあり、琵琶湖疏水に姿を映している近代建築が京都国立近代美術館である。その鳥居と岡崎公園に挟まれた地区には、同館の他に、京都市京セラ美術館、京都府立図書館、ロームシアター京都、京都市動物園、京都市勧業館（みやこめッセ）と文化施設が並ぶ。学芸課研究員の松山沙樹さん（以降、松山さん）におはなしをうかがった。

## 1. 教育普及室

京都国立近代美術館で、障害者等の文化芸術活動にかかる担当は学芸課の教育普及室となるそうだ。室長は現代美術等の企画展やコレクション展も担当する主任研究員の牧口千夏さん、室員は松山さん一人である（取材日当時）。松山さんは2015年に同館の任期付きの特定研究員となり、インタビューをした前年の2022年度から研究員として常勤となった。

現在の教育普及にかかる予算は同館のものに加えて、今年度ならば文化庁 Innovate MUSEUM 事業の助成金や、独立行政法人国立美術館からの各館の重点的な取り組みへの予算配分を活用している。また、文化庁委託事業「文化施設の連携による共生社会推進事業」に同館のみではなく地域の文化施設とともに参画している。

## 2. 新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業「感覚をひらく」をはじめ

同館では、2002年より全盲のアーティスト光島貴之さんらが中心となる市民団体ミュージアム・アクセス・ビューの鑑賞活動を受け入れてきた。見えない方と見える方がおしゃべりし、絵画などの美術を楽しむ活動である。毎年2回程度の活動の受け入れの窓口は教育普及担当者であった。松山さんは、その受け入れと当日の立ち合いを前任者より引き継いだ。2016年に「障害を理由とする差別の解消の推進にかかる法律」が施行された。その第五条に「行政機関等及び事業者は、社会的障壁の除去の実施についての必要かつ合理的な配慮を的確に行うため、自ら設置する施設の構造の改善及び設備の整備、関係職員に対する研修その他の必要な環境の整備に努めなければならない。」とある。松山さんは、美術館においてどのような「合理的な配慮」が可能なのか考えた。段差の解消や点字ブロックの敷設など設備面を改善することは簡単ではない。一方で、担当しているワークショップや、普段の鑑賞プログラムなどに、これまで参加することが困難であった方にも参加してもらえるような、ソフト面からの対応は取り組みはじめやすい。同年、国立民族学博物館で開催されたシンポジウムに一般参加し、先進的に取り組む美術館や研究者、広瀬浩二郎先生を中心とするユニバーサル・ミュージアム研究会の存在も知った。

障害者の活動を受け入れるだけでなく、美術館の企画としてより能動的に取り組むために、館内で総務担当者も含めて相談し

プロジェクトとして立ち上げ、運営費用獲得のために文化庁の助成金申請もした。その助成金採択もあり、2017年より同館が中核施設となる「新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会」が主催する、「感覚をひらく」という名称の事業がスタートした。

事業は年度により異なるが、フォーラムや、作品に触れることができる展覧会、ワークショップなどである。また活動を紹介する「感覚をひらく」というパンフレットを来館者に無料配布している。パンフレットの表紙には「感覚をひらく あなたは ●●●●人目の登場人物です。」と、一枚ごとに手書きの数字がある。【図 15-1】



【図 15-1】調査者が2023年10月20日に手にした「感覚をひらく」パンフレット、9321人目であった

住所 京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1  
〒606-8344  
電話 075-761-4111  
URL <https://www.momak.go.jp/senses>

### 3. 見えない方も企画側に入る ABC プロジェクト

2017年からはじめた「感覚をひらく」事業を重ねる中で「ワークショップの現場で起こることはすごく面白く、参加者の個性や温度感によってそこで発見されるもの・ことが大きく変化する」と松山さんは考えるようになったという。例えば、見えない方が一人でも入っていることで、見えている人が、あたりまえと思っていることが、見えない人にはあたりまえでないことに気づかされる。そこでの会話は、学芸員による作品解説と異なる。参加者同士のやりとりや、偶然性のようなことの中に、作品自体の新たな魅力や面白さが生まれてくる。それがワークショップを重ねることの意義だと感じた。そこで、見えない方も企画側に入って一緒に考えるワークショップの作り方をういて、「感覚をひらく—新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」の中に「ABCプロジェクト」という新しいプログラムを立ち上げた。Aはアーティスト、Bはブラインド、Cはキュレーターの、それぞれの頭文字である。

京都には、まだ美術館に来たことがない見えない方も沢山いる。そのため、盲学校や、点字図書館、ライトハウスを訪ねるアウトリーチ活動をしていきたいが、かといって美術館の収蔵品を頻繁に持ち出すことは難しい。作品のレプリカを作成するという方向もあるが、「感覚をひらく」事業では、アーティストとともに、所蔵作品にちなんだ館外に持ち出せるツールをつくらうと考えた。アーティストと一緒に作って、アウトリーチのワークショップにつなげていく企画段階

から、見えない方にも入ってもらう。

ABCプロジェクトがはじまった時期はコロナ禍と重なっていたため、当初は手でふれることができるツールを用いたアウトリーチ活動を目指していたが、「美術館で展示し、希望する人が、個人の判断で触れる」という形式に変更した。

2019年からプロジェクトを立ち上げ、2020年度に石黒宗磨、2021年度に河井寛次郎と2回続けて陶芸作品を取り上げ、2023年度の3回目に長谷川三郎が1937年に描いた抽象画《蝶の軌跡》をテーマとし「チョウの軌跡—長谷川三郎のイリュージョン」と題した企画展示を行った。今回の(A)アーティストは中村裕太さん、(B)ブラインドは安原理恵さん、(C)キュレーターは松山さんの3人であった。

チラシにも、さわって楽しめる工夫がある。「切り欠き」がつけられ、その位置にQRコードがあることを示した。またテーマ作品《蝶の軌跡》に描かれている八の字型に穴をあけ、指でたどれるようにデザインした。

### 4. アーティストがつくる触図の表現

ABCプロジェクトでつくりあげた展覧会「チョウの軌跡—長谷川三郎のイリュージョン」は、コレクション・ギャラリーの展示室中央の部屋(中)とその部屋に入る手前の空間(外)を用いて開催された。本展を鑑賞し調査者は「全体像がパッと見てわからない。外の部屋の作品が、中の部屋の作品と呼応しているのか、同じ番号が振られているので、つながりを感じなくもない。

しかし、どういう意図で、これらの作品が集められ、展示されているのか。なぜ、触る図(以降、触図と略す)の方は要素が省略されているのか。」との感想と疑問を最初に抱いた。時間をかけて鑑賞を続ける中で、触れる図として展示されている陶土のタブローに彫られた「線」のキワに、バリが残されていることを発見した。その触図と同じ番号がある、吉原治良《作品》を注意深く見ると、描かれている「線」ににじみがあった。触図で「線」のにじみの形状を寸分たがわず触れる隆起物に置き換えたのではない。陶土に線を彫った時に生まれた副産物としてのバリは、線を描き、にじみを生んだアーティストの表現をそのままに表しているように、調査者は感じた。

それら触図14点と、展示されている絵画作品は隣同士に並べられておらず、中の展示室と、外の展示室に分かれている。松山さんによると、「隣同士に展示するという方法もあるが、触れるものの横にあると、絵画にもふれて良いのかなという誤解を生み、安全上の問題がおこる恐れがある」との理由もあった。同時に、触図は、大きく省略をしており、解釈を加えてつづられ、「見えない方への美術作品の説明がこれです」ではない。絵画作品と触図とを一对一の関係で見せるのではなく、長谷川三郎の作品について14点の触図を手掛かりに総合的に考えられるような空間にしたいというアーティストの中村さんからの提案もあり、美術館とも協議のうえで、隣同士でない展示構成となった。

ブラインドの安原さんは展覧会の展示構成の場には加わらなかったが、《蝶の軌跡》をアーティストの中村さんや学芸員の松山

さんと共に言葉で鑑賞したり、触図の作成において、素材の触り心地などについて、中村さんと意見交換をした。また、触図の展示方法について、壁面に垂直ではなく、長時間でも触りやすいように傾斜をつけてはどうかとのアドバイスもあった。また、展示作品の関連を示す数字の位置も、見えない方も数字は触ってわかることもあるというので、触図のキャンパスの右下にいった。

アーティストと美術館では触図の作り方が違うだろうと、松山さんは経験を通して考えている。美術館は絵画などの作品情報をどれだけ正しく伝えられるかということをも前提として作成する。情報保障という観点から、視覚で捉えられる情報を届けるという姿勢は抜きにして考えられない。しかし今回、アーティストは自身の目を通して、自身の解釈のもと触図を作成した。【図15-2】

松山さんらABCのメンバーで話さず、美術館が触図を制作する際に、作品の形状や構図を忠実に起こすか、どれだけ細かく伝えられるかに、色々チャレンジしている」といったことや「ぜんぶ説明しすぎず、逆に少ない要素の中から、いろんな想像を膨らませるような触図があってもいいんじゃないか」といったアイデアが出され、そうした議論を受けてアーティストの中村さんが発想したという。

このような「感覚をひらく」も「ABCプロジェクト」も、決まった答えがない事業であり「ずっとやっていくことになるんだろうな」と松山さんは考えている。視覚障害を切り口にはじめたが、聴覚障害、精神障害、車椅子ユーザーなど、さまざまな障害を持つ方、障害と呼ばれていないが、美



【図 15-2】 中村さんが作成した触図をふれて鑑賞する 撮影：表恒匡、提供：京都国立近代美術館

美術館に来ることが簡単ではない、小さい子どもや高齢者など、まだつながりがない方々も少なくない。今後は、機会があれば、さまざまな方々と共に考えることで、美術の楽しみ方や美術館での過ごし方の幅を広げていきたいとの思いもある。

## 5. 地域の文化施設との連携事業 CONNECT ⇄

京都国立近代美術館は2020年度から毎年、京都・岡崎公園一帯の美術館や図書館、劇場、動物園などの文化施設等が連携して、障害がある人もない人も、多様性や共生社会について考えるための文化庁委託事業のアートイベ

ント「CONNECT ⇄」に参加している。同イベントは、2016年に東京の国立新美術館で開催された「ここから—アート・デザイン・障害を考える3日間」展（以降、2019年まで毎年開催）のコンセプトを継承するものである。文化庁の委託事業として、障害のある方の表現・鑑賞活動を活性化させることや、障害の有無に関わらずともに表現や鑑賞に参加できる環境づくりを目的としている。

昨年度2022年の「CONNECT ⇄\_アートでこころをこねこねしよう」では、同館1階ロビーを会場としプログラムの一つとして、耳の聞こえない鑑賞案内人の小笠原新也さんを招いて「筆談鑑賞会」を行った。大きな模造紙をひろげ、その真ん中に鑑賞する絵の画像を貼る。可能ならば実物の絵

を前に置く、無理な場合はスクリーンに映す。声を使わず、文字や絵を使い、5～6人で絵に関する話を、大きな模造紙に書く。書く中で、参加者が互いに質問したり、似ているなというところも書き込んでいい。聞こえない人、聞こえにくい人、聞こえる人、誰でも参加できる、というのが筆談鑑賞会である。声をつかっての対話型鑑賞と時間の流れ方が異なったように感じた。また後からも見返せる形で絵についての会話が残せる。そして、参加される方の心理的なハードルも低かったようだ。何を書いてもいい、他の人と意見がかぶってもいい、「すごく参加しやすかった」との感想があった。

本年度2023年12月「CONNECT ⇄\_アートでうずうずつながる世界」でも、同館1階ロビーを会場とした。そこを「うずうず広場」と名づけ「CONNECT ⇄」の情報拠点とし、かつそこに4種の展示を行った。一つは生活介護事業所「ぬかつくるとこ」によるナントナティックウェイトリフティングという活動の紹介と体験コーナー、持てば軽い手作りのパーベルの展示。社会福祉法人さふらん会さふらん生活園に所属する井口直人さんによるコピー機をつかったセルフポートレートとコラージュが混在したカラフルな作品展示と体験コーナー。社会福祉法人やまなみ会やまなみ工房に所属する酒井美穂子さんが日々持ち歩き「にぎにぎ」と触り続けていた袋麺「サッポロ一番しょうゆ味」のコレクション。そして、ABCプロジェクトのアーティスト中村裕太さんが京都府立盲学校で行ったアウトリーチプログラムに参加した生徒たちの作品である。また、今年度も小笠原さんを招いて「筆談鑑賞会」も開催した。な

お、今回の「筆談鑑賞会」のファシリテーターには、京都在住の聾者でアートトラベラーの徳江サダシさんも加わった。

## 6. 研究会「ひらくラボ」

同館で7年間行ってきた「感覚をひらく」のワークショップやアウトリーチ、フォーラム、展示の次の段階として、研究会「ひらくラボ」を2023年3月にスタートさせた。全国の美術館関係者ら20名を招いた非公開の研究会である。【表 15】

現在、「感覚をひらく」事業に限らず、全国の美術館や学校施設等で、視覚だけによらない美術鑑賞の実践が行われている。そうした活動は、とりあげる作品も、実施場所も、また展示とワークショップなどアウトプットの方法も異なる。しかし、松山さんは「やろうとしている方向」は、共有できるのではないかと考えている。そのために、「感覚をひらく」事業や他の美術館等での実践について、展示やワークショップといった最終的なアウトプットがどうなったかだけでなく、「失敗談じゃないけど、お悩みリストというか、もやもやリストというか」を共有することで更に議論がひらかれていくのではないかと考えている。また「展覧会と違い、教育普及の活動は、実施概要は残るが、どういう思いでそれが行われたのかなどが外部からはわかりにくい」とも考える。情報の見える化と共有の第一歩として2023年3月の研究会を踏まえて10月に「研究会「ひらくラボ」実施報告書」を作成し、ウェブサイトで公開した。

【表15】感覚をひらく研究会「ひらくラボ」実施概要とプログラム（『研究会「ひらくラボ」実施報告書』をもとに中西美穂が2024年に作成）

一日目   美術館は、視覚だけに依らない鑑賞経験をどのようにデザインできるか	
[課題意識の共有]	「感覚をひらく」の活動から 松山沙樹（京都国立近代美術館）
[話題提供]	京都国立近代美術館 感覚をひらく事業「ABCプロジェクト」について 中村裕太（作家）  国立国際美術館 視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ「見れば見るほど見えなくなる ジャコメッティ《ヤナイハラI》を徹底的に鑑賞しよう」 藤吉祐子（国立国際美術館）  小林古径記念美術館「手から味わうお茶会」 佐藤優香（東京大学大学院情報学環）
[ディスカッション]	
二日目   美術館は「絵にさわる」（絵画作品を二次元の触図を通して伝える）体験をどのようにデザインし、届けることができるか	
[課題意識の共有]	「さわるコレクション」と全国の美術館における触図の状況から 松山沙樹（京都国立近代美術館）
[話題提供]	愛知県美術館での触図制作と活用の事例 藤島美菜（愛知県美術館）  岡山県立美術館での触図制作とワークショップ 岡本裕子（岡山県立美術館）  三つの事例をふりかえって 広瀬浩二郎（国立民族学博物館）+参加者  「副触図」と触図を考えるキーワード—触図の議論のまえに 広瀬浩二郎（国立民族学博物館）
[ディスカッション]	

会場：京都国立近代美術館 1階講堂

主催：新たな美術鑑賞プログラム創造推進実行委員会（中核施設：京都国立近代美術館）

助成：令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業

【感想】

パンフレットのナンバリングは、関係者以外も「感覚をひらく」事業に参加できることを意識させるのにとっても良いと思った。またABCプロジェクトで生み出された触図が、触図の機能にとどまらず、芸術作品単体としても楽しめ興味深かった。

【調査概要】

実施日：2023年10月20日（木）

場所：京都国立近代美術館 学芸室

【調査対象者】

松山沙樹（まつやまさき）

京都国立近代美術館学芸課研究員。大学で西洋美術史、大学院で美術館教育を学んだのち美術館の現場へ。教育普及担当として、学校連携や展覧会関連ワークショップなど多様な利用者と美術をつなぐ活動や、見える・見えないに関わらず共に楽しめるユニバーサルな鑑賞の可能性を探る「感覚をひらく」事業を担当している。

【参考資料】

- ・京都国立近代美術館教育普及室・松山沙樹，2023『令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）感覚をひらく研究会「ひらくラボ」実施報告書』新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会  
[https://www.momak.go.jp/senses/work\\_hiraku\\_lab.html](https://www.momak.go.jp/senses/work_hiraku_lab.html)
- ・広瀬浩二郎，2023『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない 思考と実践のフィールドから』三元社
- ・令和5年度文化庁委託事業「文化施設の連携による共生社会推進事業」2023，『CONNECT ⇄\_アートでうずうずつながる世界 ガイドブック』

# 滋賀県立 美術館

滋賀県立美術館は、新名神高速道路の草津田上インターを降りて車で約5分のびわこ文化公園の一角にある。駐車場からもバス停からも、緑豊かな公園内の遊歩道を歩いて美術館にたどり着く。隣には滋賀県立図書館がある。同館の学芸員の山田創さん（以降、山田さん）を訪ねた。

## 1. “みかた”の多い美術館展

お話を伺う前に、山田さんが中心となり担当した展覧会「“みかた”の多い美術館展」のギャラリートツアーをしていただいた。【図16-1】この展覧会は企画として実験性が高い。しかし子どもや家族連れを始め、予想外に来場者はあるとのことである。同展の方向性は展示冒頭に示されている。

当館も含めて多くの美術館が、公にひらくための取り組みを行っています。しかしながら、実際には、小さな子どもがいるという理由や、障害があるという理由などで、美術館に来ることを諦める人がいることは、現実として認めなくてはなりません。

本当の意味で、美術館をあらゆる人々のための場所にするには、なにが必要なのでしょう。本展ではこのことをテーマに、いままで美術館から遠かった人たちの観点＝“みかた”を、展覧会の中に積極的に取り込みました。その結果、本展

には8つの“みかた”を導入しています  
[山田創：2023]

8つの“みかた”の中には、館外のグループの人たちと一緒に考えてつくった5つの“みかた”もある。また、展覧会に関わるコーナーや作品の解説は「やさしい日本語」という考え方をふまえている。冒頭の展覧会趣旨文は、日本語、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語の5か国語表記とした。ポルトガル語は、展覧会開催の時点で、滋賀県に一番多い在住外国人であるブラジルの方たちの母語である。山田さんは「みなさんにウェルカムの姿勢で、さまざまな言語がここにあるのは、大事なことだと思う」という。

以下に8つの“みかた”を記す。

[1 おはなしをして、みる]

県内在住の小さな子どもがいる一般家庭の方とのやりとりでつくった。「子どもに語り掛ける言葉があれば、もうちょっと楽しく過ごせるのかもしれない」と議論し、美術館側から、おはなしを誘発する「おはなしのたね」を設置した。

[2好きなことをいって、みる]

鑑賞者自身がキャプションを書いてもよいようになっている。同館近くの知的障害がある人の活動拠点づくりを中心に活動するNPO法人BRAH=art.に所属する方々と考えたコーナーである。

[3 さわったり、聞いたりして、みる]

「ユニバーサル・ミュージアム—さわる!“触”の大博覧会」(国立民族学博物館、2021年)に出品された作品の一部を借用するとともに、触ることのできる館蔵品を展示し、触ったり、音を出したり、寝そべることができる展示である。

[4 見えない、聞こえない世界を考えて、みる]

松井利夫の陶芸作品《つやつやのはらわた》の展示と盲聾の方との鑑賞ワークショップ記録映像のコーナーと、百瀬文の映像作品《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》の上映展示がある。

[5 絵の高さを下げて、みる]

同館の重要なコレクションである、元永定正、田中敦子、白髪一雄の迫力ある抽象画の展示の高さを、重症心身障害者施設えがおの利用者で構成される「マーベルスターNO.1」のメンバー4人と決めた。その結果、絵画の下面が床すれすれに近くなるほど低くなった。

[6 思い出して、みる]

県内の救護施設ひのたに園で暮らす4名が来館し作品鑑賞ののちに、各者のライフヒストリーを聞き取り、それを作品とともに紹介した。聞き取りも担当した山田さんはそれぞれの思い出を書き出した言葉が、「短編小説みたいな奥行きがある」と感じたという。

住所 滋賀県大津市瀬田南大萱町  
1740-1  
〒520-2122  
電話 077-543-2113  
ファックス 077-543-2170  
URL <https://www.shigamuseum.jp/>

[7 映えて、みる]

県内のブラジル人学校「サンタナ学園」の子ども達とつくったスマートフォンで自撮りできるコーナー。館所蔵のカンディンスキーの版画を拡大プリントして背景とした。

[8 いっそ自分でつくって、みる]

自由に使える画材が置かれたカラフルなテーブルやいすがある。鑑賞者が自由に創作し、壁面に展示ができる。休日には、沢山の子ども達が「はまったように」楽しむそうだ。



【図 16-1】“みかた”の多い美術館展 チラシ

## 2. サポート型な監視員さん

鑑賞者が参加する仕掛けが各所にある展示において、展示を常に見守り、必要とあれば鑑賞者の参加の手助けする役割が必要となる。今回の「“みかた”の多い美術館展」の[8 いっそ自分でつくって、みる]では、教育普及の担当学芸員やボランティアが休日に参加をサポートした。それ以外の日や展示においては、一般的に「監視員さん」と呼ばれる、展示室内に常駐するスタッフが、それを担った。

同館の監視員さんは委託業務としており、美術館運営の内部に在るわけではない。一般的に監視員は「作品に触れないように」など鑑賞行為の制限をする役割をする。しかし今回の「“みかた”の多い美術館展」では、展示会の意図を汲み取り、現場で積極的にコミュニケーションをとっていた。

例えば[2好きなことをいって、みる]では、子どもや障害がある人の言葉を聞き取ってあげていたり、[3さわったり、聞いたりして、みる]では作品を触りやすいように案内したりしていた。さらには[4見えない、聞こえない世界を考えて、みる]の上映時間にあわせて、鑑賞者に声をかけたりもする。

展示会オープン前に、担当学芸員として山田さんは、監視員さんに展示会の説明を行った。山田さん曰く、それは他館でも一般的であろうとのことであった。それに加えて、同館の監視員さんは、所属企業で、障害のある人への対応について講習を受け、その結果、鑑賞者へのアプローチを実践している状況があるという。

## 3. 県立近代美術館から県立美術館へ

滋賀県立美術館は2021年6月に再オープンした。開館は滋賀県立近代美術館として1984年、2017年から改修にかかる検討のための休館を経て、名称も滋賀県立美術館と変更した。

滋賀県立近代美術館として開館した当初より鑑賞教育プログラムに力をいれていた。その頃から勤務している平田主任学芸員は、現在「アート博士」として美術のアウトリーチ活動を県内で行っており、同館再任用職員として、館の教育普及の学芸員へのアドバイスをしている。同館に以前からあった「たんけん美術館」プログラムの蓄積も、現在の教育普及プログラムの「鑑賞をして、創作体験をする」ノウハウに活かされているという。

現在の体制は、学芸課長1人、展示会など企画やコレクションに関する業務を中心に行う学芸員が7名、教育普及担当者が3名、広報担当が1名、アーカイブ担当1名である。他に総務などの管理担当者がある。

なお、他館ではあまりないことであるが、館長の方針で、展示会を担当した学芸員名を明記している。

## 4. 作品収集方針の一つとしてのアール・ブリュット

同館ホームページの「収集方針とコレクションの特色」(注16-1)によると、開館以来、①日本美術院を中心とした近代日本画、②滋賀県ゆかりの美術・工芸等、③戦

後アメリカと日本の現代美術を軸に作品を収集しており、2016年からは、④アール・ブリュット、今後は新たに⑤芸術文化の多様性を確認できるような作品を収集方針に加えるとする。

そのアール・ブリュットについて同館ホームページの「アール・ブリュットについて」(注16-2)には、「厳密な定義は難しいのですが、芸術の教育を受けていない人たちによって制作された独自の表現を指す概念」とし「1940年代にフランスの画家、ジャン・デュビュッフエが提唱」としている。また、同館がある滋賀県において「糸賀一雄、池田太郎、田村一二らにより、1946年に障害のある児童等の入所・教育・医療施設「近江学園」が津市南郷に創設され、その土地の良質な粘土を素材とした造形活動が始まりました。その後、落穂寮、信楽寮、一麦寮など、県内の多くの福祉施設で、主に知的障害のある人たちによる造形活動が活発に展開され、今に至っています。」と地域固有の障害がある人の創造活動があったとの前提をあげている。その上で、同館ではこれまでに「アール・ブリュット ―バリエーション―」展(2008年)、「生命の徴 滋賀とアール・ブリュット」展(2015年)、「人間の才能 生みだすことと生きること」(2022年)の実績があり、「2021年現在、アール・ブリュットのコレクションは、県内および国内作家の絵画・陶芸作品を中心に155点」としている。

山田さんは、「アール・ブリュット」と「障害のある人の創作」とを完全に切り離して考えることはできない、と捉えているようだ。また、山田さんは、このような背景か

ら必然的に、滋賀県立美術館で障害のある人の作品が展示される機会は、他館と比較しても多いのではないかと語る。

最新の動きとしては、2023年8月に、日本財団が所蔵していた、2010年にパリで開催された第1回アール・ブリュット・ジャポネ展に出品された作品等のうち、美術作品44作家 550件を受贈した。2024年度以降に公開予定とのことである。

## 5. 県の文化政策として

滋賀県の文化政策においては、障害者等の文化芸術活動やアール・ブリュットにかかる取り組みに積極的である。滋賀県文化振興基本方針（第3次）（令和3年度（2021年度）～令和7年度（2025年度））、滋賀県障害者文化芸術活動推進計画（令和2年度（2020年度）から令和5年度（2023年度））、美の魅力発信プラン（令和3年度（2021年度）から令和7年度（2025年度））、文化庁・文化観光推進法に基づき策定し、文化庁・観光庁から認定を受けた拠点計画（注16-3）である「滋賀県立美術館文化観光拠点計画」（令和3年11月10日認定）でも、アール・ブリュットについて触れている。

また同館内には県の施策に基づく「滋賀県文化芸術振興課美の魅力発信推進室」があり、同館ホールにおいて「アートと障害を考えるネットワーク2023」や、エントランスにて、信楽焼という伝統工芸の分野と、アール・ブリュットをコラボレーションするプロジェクト展示を行っている。

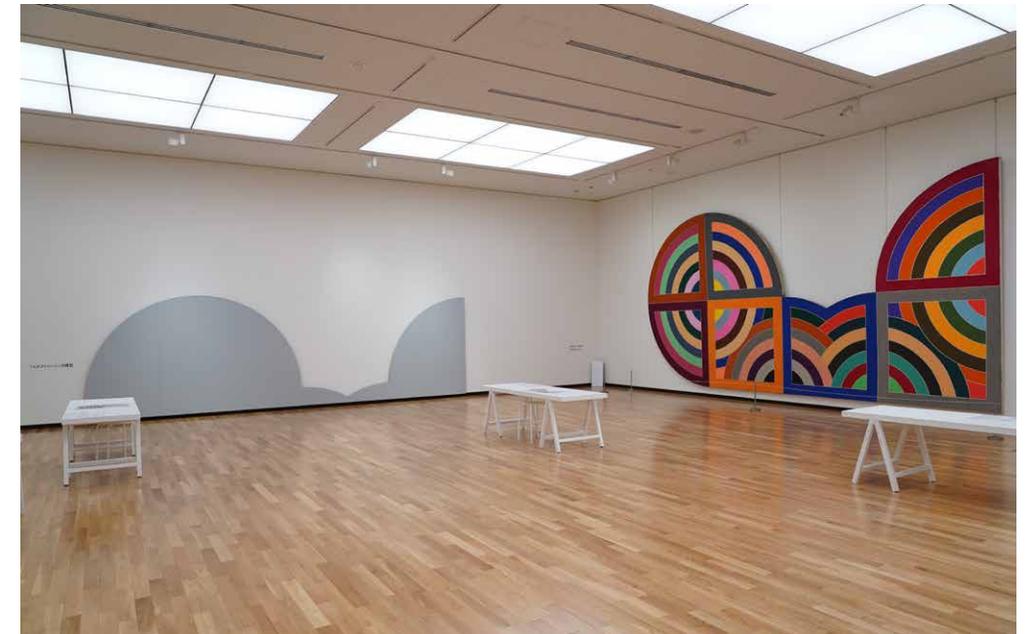
## 6. さまざまな触図が紹介された常設展

冒頭で紹介した企画展「“みかた”の多い美術館展」と同時開催された「さわるSMoAコレクション」において、館コレクション作品と、その触図が展示された。教育普及担当者が企画の中心となった。目を引くのは、フランク・ステラが1967年に制作した《イスファハーン》という大きなタブローが、実物と同じスケールで再現しつつ、上辺を手でさわることのできるように、下部をカットした模型と並んで展示されていることである。【図16-2】

触図は、他館からの貸し出し希望があっても、触ることにより劣化していくため貸し出しは難しい。一方で、大きくないもので、凹凸をつけるのであれば、毎回刷り直すという方法もあり得る。その場合は、絵画作品などの凹凸をつけて転写する触図のデザインが重要となる。そのデザインさえあれば、触図を貸し出すのではなく、デザインを貸し出すという可能性も考えるかもしれないとのことであった。

## 7. 民間ミュージアムの経験

今回お話をうかがった学芸員の山田さんは、一昨年、2022年の夏まで、社会福祉法人グローの職員として同法人が運営するボーダレス・アートミュージアム NO-MA（以降 NO-MA と略す）の学芸員であった。同館は滋賀県近江八幡市の古い日本家屋を改築した小規模ミュージアムであり、障害がある人達の創作作品と現代美術を並行的



【図16-2】 フランク・ステラ《イスファハーン》(右)とその模型(左)との展示風景

に展示している。山田さんはNO-MAにおいて、障害がある方の創作の発表の場を一般化させる役割は、ある程度を果たしたと考えていたところに、ユニバーサル・ミュージアムを提唱する広瀬先生と出会いもあり「障害がある方と美術鑑賞をつなぐ」という活動に2020年頃から取り組んでいた。

NO-MAでの経験は、滋賀県立美術館で生かされているのだろうか。例えばNO-MAの展示空間は小規模だが、県立美術館は大きい。学芸員として展覧会づくりに戸惑いはなかったのか。調査者から山田さんに問うてみた。

山田さんは「NO-MAでは出張展示などで、大会場の経験もあり、規模については縮小拡大の感覚で行けた」とのことである。しかし「今回の展覧会をつくるにあたり、

根本的に構造が違う点は、コレクションの作品を使う」ことだったと言う。NO-MAにもコレクションはあったが、それよりもはるかに多くの国内外のさまざまな著名な作家の作品が滋賀県立美術館にコレクションされている。NO-MAでの企画展は、さきにテーマを決め、そのテーマにあわせて学芸員が作家を選ぶ。全国にどのような障害がある人のどのような作品があり、どのような作家がいるかという情報は、山田さんと、もう一人のNO-MAの学芸員の横井悠さんと、相当数の蓄えがあった。したがって、企画の中でテーマをあげれば、仔細に検討し選んでいくことが可能であったという。しかし、滋賀県立美術館では、定期的にコレクションを活用した展覧会を開催しており、今回の「“みかた”の多い美術

館展」も、同館のコレクションをベースとした展覧会であった。膨大なコレクションの中から選んでいくという作業があり、そこがNO-MAでの展覧会と異なる部分であったという。採用から展覧会まで1年半と期間も短く、初めての経験であったが、それは楽しい作業でもあったようだ。

### 【感想】

障害者等の文化芸術活動への取り組みと地域連携が展覧会を通して同時に行われている美術館だと感じた。また民間ミュージアムと公立美術館との双方の経験を持つ、障害者等の文化芸術活動に関する専門性の高い学芸員の存在に魅力を感じた。

(注 16-1)

<https://www.shigamuseum.jp/about-the-collection/collection-policy/>

(最終閲覧：2024年2月6日)

(注 16-2)

<https://www.shigamuseum.jp/about-the-collection/artbrut/>

(最終閲覧：2024年2月6日)

(注 16-3)

本リサーチの対象館においては滋賀県立美術館の他に十和田市現代美術館が認定されている。

### 【調査概要】

実施日：2023年10月23日（月）

場所：滋賀県立美術館 展示室

### 【調査対象者】

山田創（やまだそう）

2017年からボードレス・アートミュージアムNO-MA学芸員、2022年から滋賀県立美術館学芸員（専門はアール・ブリュット）。「障害者福祉の現場で生まれる美術的なモノ・行為・関係性」、「自閉症者の美術的表現」、「障害者と美術鑑賞の関係」、「社会課題とキュレーション」などに関心を持ち、研究、執筆、展覧会づくり、場作りを行う。主な担当展に、「“みかた”の多い美術館展」（2023、滋賀県立美術館）、「反復と平和——日々、わたしを繰り返す」展（2022、ボードレス・アートミュージアムNO-MA）、「79億の他人——この星に住むすべての「わたし」へ」展（2021、ボードレス・アートミュージアムNO-MA）など。

### 【参考資料】

滋賀県文化振興条例

『滋賀県文化振興基本方針（第3次）』

『滋賀県障害者文化芸術活動推進計画』

『美の魅力発信プラン』

『滋賀県立美術館文化観光拠点計画（令和3年11月10日認定）』

山田創『“みかた”の多い美術館展 さわる知る 読む聞くあそぶ はなしあう 「う～ん」と悩む 自分でつくる！ 展覧会ガイド+作品リスト』滋賀県立美術館

# 八戸市 美術館

八戸市の中心街にある美術館に入るとジャイアントルームと呼ばれる大きなエントランスがある。主事兼学芸員の田村由衣さん（以降、田村さん）、同、高橋麻衣さん（以降、高橋さん）にお話をうかがった。

## 1. 100年後の美術館

八戸市美術館は、1986年に開館し2017年に閉館、建て替えして2021年に再開館した。同年に施行された八戸市美術館条例の第1条には「美術品及び美術その他の芸術に関する資料の収集、保管及び展示並びに美術その他の芸術に関する調査研究及び普及活動を行うことにより、市民の文化及び芸術の振興に資するとともに、文化芸術活動を通じた様々な出会い、学び及び交流の機会を提供し、もって新たな文化の創造と八戸市全体の活性化を図るため、美術館を設置」とあり、通常の美術概念の枠におさまらない、出会いや交流をも明文化している。八戸市新美術館管理運営基本計画（平成31年1月策定）には美術館のビジョンを「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム～」とし、中期運営計画でもそれを大項目として置いており、設置に込められた美術館の使命は100年という、ゆっくりとした時間枠の中にある。（注17-1）

住所 青森県八戸市大字番町10-4  
〒031-0031  
電話 0178-45-8338  
ファックス 0178-24-4531  
URL <https://hachinohe-art-museum.jp>

## 2. 手話付きガイドツアーをはじめのきっかけ

手話通訳者付きで学芸員と展覧会を巡る「手話付きガイドツアー」に取り組みはじめてきっかけは、昨年度2022年11月に行った「アートファーマープロジェクト種さがしラボ02 館長座談会『美術館のアクセシビリティ』」である。同プログラムでは、八戸市美術館の館長と、アーツカウンシル東京のディレクター森司さん、聾啞者の両親をもち、「めとてラボ」（注17-2）にも所属するインタープリターの和田夏実さんの三者が対談した。

その後、アクセシビリティのプログラムを具体的に進めるために、「めとてラボ」のメンバー2名と、青森県在住の学芸員資格をもつ聴覚に障害がある方1名の計3名を招いて、障害のある方の話をうかがった。

その中で、「聴覚障害者の方たちは、美術館は、自分たちとあまり関係がないと思っている」「絵は目で見るので、耳の聞こえない方にとってハードルはほぼないと思われがちだ。文字を読めば情報は知れる。しかし手話を主たる言語とする人々にとって、手話で質問や話をするなどがないとコミュニケーションがとれたように思えない」という意見が出た。学芸員の高橋さんは「手話のガイド表示」があることで、聴覚障害者に理解があるという美術館側の姿勢が見え、そのことで障害のある方たちに「自分たちにも開かれているんだ」と理解されることに気付かされたという。一方で、手話通訳にかかる費用が、分単位で決まっており、限られた時間の中で行える企画を考え

る必要があることも学んだ。ガイドツアーであれば、時間が決まっており、手話の対応が館内にあることも示しやすかった。そのため、八戸市美術館では「手話付きガイドツアー」にまず取り組むこととした。

## 3. 美しいHUG！手話付きガイドツアー

展覧会「美しいHUG！」（2023年4月29日から8月28日）においては、同館所属の6名の学芸員が、それぞれ、「美術館運営スタッフに聞く見どころツアー」「手話付きガイドツアー」「建築家と見るガイドツアー」「造園屋さん和見るガイドツアー」「野点プロジェクトメンバーと見るガイドツアー」「タノミマスプロジェクトメンバーと巡るガイドツアー」と異なるテーマで、土曜日の11:00～12:00にガイドツアーを実施した。参加希望者は、申込不要、当日先着10名程度、参加無料だが展覧会観覧チケットが必要である。

高橋さんは「手話付きガイドツアー」を担当した。定員10名であったが、聴覚障害のある方が10名、一般の方が5名で、合計15名となった。全体で1時間。手話通訳者2名が交代しながらツアーに同行した。

準備段階で、以前、話をうかがった、県内在住の学芸員資格をもつ聴覚障害者の方にアドバイスを求めた。例えば、黒川岳による石の彫刻《石を聴く》は、一抱え以上ある大きな花崗岩に人の頭の大きさぐらいの穴があり、その穴に頭を入れて鑑賞する作品である。通常ならば《石を聴く》という作品名なので「石を聴いてみてください」

と解説する。しかし、聴覚障害がある方には「聞く」という行為は分かりにくい。そこで「感じてみてください」と言い換えてはどうかなど、当事者ならではの視点から具体的なアドバイスももらった。また、当初は学芸員の作品解説だけを手話通訳する予定だったが、手話通訳がいるのならば、もっとコミュニケーションを取ってもいいのではないかと、対話型のツアーとなった。さらには、鑑賞終了後に感想を共有する時間を10分程度の質問タイムとして設けた。

ツアー当日、青木野枝の鉄の彫刻作品《もどる水／八戸》について、日の光や照明の当たり方により見え方が変化するので「夜見ると雰囲気が変わると思います」という感想をはじめ、見え方や感じ方について話が弾んだ。手話付きの鑑賞ツアーの参加者

全員から質問やコメントが出るほど興味をもってくれた。【図 17-1】

#### 4. 社会福祉施設への作業依頼

「美しい HUG！」展の出品作品の一つ《タノニマス》は、アーティストの顔をかたどったお面に、来館者が自由にデコレーションする参加型作品である。展示前に、お面に穴をあけて紐を通しておく作業が必要であった。その紐通し作業を、アーティストや美術館スタッフだけではなく、市内の社会福祉施設に通所する社会人の方々に依頼した。作業の前に、どのような作品なのか理解を深めてもらうために、アーティストによるワークショップを開催し、実際にデ

コレーションしてもらった。ワークショップには社会福祉施設を利用している高校生も参加した。その作品は同展に展示され、社会福祉施設の方たちも来館し鑑賞した。

同展は、美術館と来館者、作品と来館者、市民やまちの人と美術館が HUG！しあう、というコンセプトであった。そのため、作品を紹介して、美術館の外の様々な場や人となつていこうという主旨に沿った動きであったという。

#### 5. アートファーマー

同館では、美術館活動に主体的に関わる市民を、アートでコミュニティを耕して育む「アートファーマー」と呼んでいる。様々な属性の人々や地域資源が出会い、アートを通して地域社会のことを考えたり、アーティストとの創作活動に取り組んだりする「アートファーマープロジェクト」を継続して実施している。例えば前述の《タノニマス》であれば、作品の準備や作品の説明、観覧者がお面をデコレーションするための道具の整理などをアートファーマーが担った。《タノニマス》のアートファーマーを「タノニマス」と名付け、高校生以上をホームページや市の広報誌で募集した。面接などの選抜はなく、希望する人は誰でも参加可能だ。参加者の年齢は幅広く、高校2年生からご年配の方まで約30名が参加した。最高齢の方は車椅子で、親子で参加。他にも近所の友達や家族を誘って、周囲を巻き込んで参加する方もいた。

展示には同館の案内員が常駐していたた

め、アートファーマーは土日や仕事終わりなど、各々のできる範囲で活動した。会期前に、全4回の説明会を開催し、アーティストからの作品レクチャー、会場での来館者との対話を想定した対話型鑑賞、お面の準備作業、材料の仕分けなどを行った。

「タノニマス」のメンバーは、自発的にLINEグループを立ち上げ、そこでは八戸市美術館に限らないアート情報を活発に交換しているという。また、災害時の来館者避難誘導についても、同館の決まった動線を確認しつつ、具体的にどう案内すると良いのかといった情報もメンバー間で確認していた。このようにアートファーマーはアーティストの作品の意図を汲みつつ、積極的に活動していた。

#### 6. 行政・学校・市民との連携の中で

行政や学校、市民との連携について、主に田村さんにうかがった。同館では、市の障害者雇用の方針に沿って、障害のある方が市の会計年度任用職員として任用され、展覧会の案内員などの業務を行っている。

また、2020年に立ち上げた「学校連携プロジェクトチーム」(注17-3)の取組がある。令和5年度のチームメンバーは、八戸市内の小学校・中学校・高等学校の教員と元教員、美術館学芸員、学校連携コーディネーター、専門家であり、チームメンバーが自由に使用できる「ラボ」を美術館内に設け、情報交換を行うとともに、全国の美術教育の事例などの研究や、教育現場で活用できる美術教育のためのプログラムやツールの開発・



【図 17-1】「美しい HUG！手話付きガイドツアー」の実施風景。右は青木野枝《もどる水／八戸》の部分

実践を行っている。学校連携プロジェクトチームの活動とは別に、障害がある子どもたちの鑑賞を受け入れる機会もあり、昨年度は聾学校の小学生の来館もあった。「学校連携」は、教員や団体からの申込時に、障害がある児童や生徒が来館することを把握した際には、合理的配慮について事前にたずねる。「話を聞くときは、できるだけお客さんがいない、落ち着いた部屋がいい」、「静かな部屋で待機したい」という希望があれば、そのための会議室などを用意しておく。このように「館では、当日こういうことができますよ、どういうことをしたいですか」というようなやりとりを行っている。学芸員に案内してほしいという希望にも応じる。そのような学校連携事業の周知方法は現在検討中である。

同館の他館にはないだろうアドバンテージは、館内が飲食可能という点であろう。建築として特徴的なジャイアントルームは、

出入り自由、使い方も自由、飲食も可であり、子どもであっても安心して来館できる雰囲気がある。見学に来た子どもたちの昼食の場に使われることもある。このジャイアントルームは、エントランスとしての役割のほかに、展示スペースや学生の勉強場所など様々な用途で使われている。建築として吸音を考慮し、おしゃべりや子どもたちの声が響きにくい。展示やトークイベントなどの各活動が同居できるように配慮がなされている。いわゆる「美術館」といった厳かな雰囲気はないが、その代わりに親しみやすさがある。さらに、市街地にありアクセスが良く、敷居が低いことが強みである。

なお、一般の展覧会のための貸館もっており、公募展の展示会場となることもある。

このようにひらかれた美術館として歩みを進めているが、一方で、「従来の美術館らしさ」を求めている市民もいるという。それらも踏まえながら、市街地にあり、ジャイアン

トルームというひらかれた空間をもつ、よい意味での「敷居の低さ」がある美術館の特性を活かしていく方向を模索中である。

また、「地域の芸術や文化、まちの歩みに寄り添いながら、未来を見据え、多様な価値観を創出し、人を育むための美術資料の収集を行う」というコレクション収集理念のもと、約3000点の日本画、洋画、版画、書、彫刻、工芸分野の美術品を所蔵している。この中には、八戸市立湊中学校養護学級生徒による《虹の上をとぶ船総集編Ⅱ 星空をペガサスと牛が飛んでいく》1976年もある。【図17-2】（注17-4）

#### 【感想】

訪問時、ジャイアントルームと呼ばれる大きなエントランス空間には、さまざまな年代の方たちがリラックスした様子で行き交っていた。ある時には書道パフォーマンスもあったとのこと。また、障害がある方たちが参加する書道展も開催されたそう。この地域では、身近な表現として「書」があることにも気付かされ興味深かった。



【図17-2】八戸市立湊中学校養護学級生徒《虹の上をとぶ船総集編Ⅱ 星空をペガサスと牛が飛んでいく》1976

(注 17-1)

市の総合計画は、2023年現在、第7次総合計画（2022年度～2026年度）である。再開館当時は第6次総合計画（2016年度～2021年度）であり、その中の「総合的に取り組む6つの政策」と「重点的に取り組む5つのまちづくり戦略」の「5つの戦略」の4番目「魅力づくり戦略」における「アート・スポーツプロジェクト」の項目において【施策1】アートのまちづくりの推進と、美術館整備も含む文化芸術活動がまちづくりに位置付けられている。一方で、現在の第7次においては、「6つの政策」が上位となり、「戦略」という位置付けはなくなっている。その第7次の概要において、美術館との明記はないが文化芸術活動は、「政策1「ひと」を育む」の施策の方向性「Ⅱ 教養・文化・スポーツを通し人生を豊かにする」の「② 文化芸術の振興」に位置付けられている。第6次から第7次の自治体文化政策において美術館が「まちづくり」から「ひとづくり」に位置付けの変化があったようだ。

(注 17-2)

東京を拠点に活動する、視覚言語（日本の手話）で話するろう者・難聴者・CODA（ろう者の親をもつ聴者）が主体となり、異なる身体性や感覚世界をもつ人々とともに、自らの感覚や言語を起点にしてコミュニケーションを創発する場をつくるプロジェクト。

(注 17-3)

2023年8月7～8日に大阪で開催された「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」（主催：独立行政法人国立美術館）において、八戸市美術館は「学校連携プロジェクトチーム」の事例報告を行った。

(注 17-4)

「八戸市美術館は、昭和30年代～50年代に制作された教育版画作品を大小合わせて500点以上収蔵している。これらの作品は、教師の坂本小九郎（さかもとしょうくろう）（1934～）が八戸市内の中学校で指導した版画であり、平成15年度に坂本から八戸市美術館に寄贈された。寄贈作品には、八戸市立鯨中学校生徒が制作した木版画集『海の物語』をはじめ、八戸市立南浜中学校生徒の「南浜のくらし」や「うみう」をテーマにした作品、八戸市立江陽中学校生徒の「船」の木版画、そして八戸市立湊中学校養護学級生徒による船の物語を表現した木版画などが含まれている。中でも、湊中学校養護学級の生徒が共同制作で完成させた木版画・《虹の上をとぶ船 総集編Ⅰ》と《虹の上をとぶ船 総集編Ⅱ》は、坂本の版画教育への姿勢と、当時の中学生たちの感受性を今に伝える代表作として知られる。総集編ⅠとⅡは、それぞれ4点の作品から成り、1点あたりのサイズが縦1m、横2mと大型の作品である。各作品には、主人公の空飛ぶ船が会う様々な場面が描かれている。生徒たちが話し合っって物語を作り、協力しながら制作した。」（解説執筆者：八戸市美術館 篠原 英里、ホームページ「はちのへヒストリア」文化財年表「教育版画」より <https://historia8.org/chronological-table/>、最終閲覧2024年2月4日）

【調査概要】

実施日：2023年11月8日（水）

場所：八戸市美術館 会議室

【調査対象者】

田村由衣（たむらゆい）

八戸市美術館主事兼学芸員。2019年から現職。展覧会や学校連携事業を担当。

高橋麻衣（たかはしまい）

八戸市美術館主事兼学芸員。2014年～2020年まで、八戸市まちづくり文化推進室にて、アートプロジェクトの企画運営を行う。2020年4月より現職となり、展覧会やプロジェクトを担当する。

【参考資料】

八戸市美術館,2023『美しいHUG!』

八戸市美術館条例

八戸市,2016年『第6次八戸市総合計画』

八戸市,2019年『八戸市新美術館管理運営基本計画』

八戸市,2020年『八戸市美術館中期運営計画』

八戸市,2022年『第7次八戸市総合計画』

# 十和田市 現代美術館

官庁街の大通りに面した芝生の敷地のカラフルな屋外彫刻とともに、白い大小の箱型の建物がリズムよく並んでいるのが十和田市現代美術館である。キュレーターの見留さやかさん（以降、見留さん）と、管理運営統括の豊川大樹さん（以降、豊川さん）にお話をうかがった。

## 1. アートでまちづくり

十和田市中心市街地活性化基本計画の第1期は平成22（2010）年に策定され、現在の基本計画の2期は平成31（2019）年に策定された。その基本理念は「アートの感動を共有し、賑わいと暮らしが共鳴する街とわだ〜市民の暮らしを支え、人々が集い・活動する中心市街地を目ざして〜」とあり、アートがまちづくりのキーワードとなっている。

それに先立つ平成17年（2005）3月に「十和田市野外芸術文化ゾーン基本計画」が策定され、平成20年（2008）にはその中核施設として十和田市現代美術館がオープンした。同館の開館以降、衰退が進んでいた十和田市街地の知名度や集客力は向上し、全国から注目され、アートでまちづくりをすすめる十和田の象徴となっている。

同館の学芸チームは館長、エデュケーターあわせて5名。その一人、キュレーターの見留さんは入職以来、同館のコレクション管理や展覧会を担当する傍ら非常勤のス

タッフとともに、教育普及プログラムも兼任していた。3年前にエデュケーター1名が新規配置された。

同館は2012年より指定管理者制度で運営されて3期目となる。運営者であるエヌ・アンド・エー株式会社は、青森県内の弘前れんが倉庫美術館の運営にも関わっている。運営においては市からの指定管理料に加えて入館料も重要である。コロナ禍前の令和元年度においては、来館者数は年間15万人程度、うち県外からの来館者が70%を占め、さらにそのうち台湾や中国大陸などの海外からの観光客が入館者の5〜6%を占めている。（注18-1）一方で、公的施設として、高校生以下は無料、障害者手帳を持つ方は、当人と付き添いは無料としている。また団体割引もあり、介助で付き添う職員への減免措置もある。

## 2. 建築と一体化した常設展

同館の建築は大きな一棟があるのではなく、敷地内に展示室群が各々連なるように配置されている。これは美術館内の活動が、街に連続してゆくような開放性を意図しているという。また同館の常設展示、38人のアーティストによる43作品は、すべて、同館のために制作されたものであり、建築の設計段階から作品と空間が深く結びついており、それは展示室のみならず、中庭や屋上、階段室などにも及ぶ。

見留さんによると、「まちの中に作品を点在させていて、まち自体を美術館にみてる構想」により、「美術館と外の空間が、つな

がっていく仕組みと」して、屋外と館内が「同じような地面のレベルにあわせている」ため「アクセスしやすくなっている」とのことであった。同時に、美術館にしては珍しく外壁がガラス張りであり、外からも視覚的に作品鑑賞できることも、美術館と外の空間のつながりを示すものであるという。

### 【図18-1】

常設作品のなかにはハンス・オブ・デ・ベークによる《ロケーション5》や、栗林隆《ザンプランド》など、作品の中に入り、作品を触ることで、鑑賞できる美術作品もある。特に《ロケーション5》は照明がほとんどないため、暗闇の中で鑑賞するような雰囲気がある。



【図18-1】十和田市現代美術館 外観 撮影：太田拓実

住所 青森県十和田市西二番町10-9  
〒034-0082  
電話 0176-20-1127  
ファックス 0176-20-1138  
URL <https://towadaartcenter.com/>

同館を訪問する鑑賞者は、無料のオーディオガイドを借りられる。ガイドは日本語、英語、韓国語、中国語の4か国語に対応している。なお、台湾からの観光客が多くをしめるため、台湾の方にわかりやすい中国語に対応している。(注18-2)

### 3. 観光推進拠点としての美術館

文化庁の文化観光推進法に基づき認定された拠点計画及び地域計画として「十和田市現代美術館を中核とした十和田市文化観光推進拠点計画」(令和2年11月18日認定)のもと、観光に寄与する文化施設として、観光客に向けた鑑賞体験プログラムのためのエディタ配置や、照明のLED化、案内の多言語化、サテライト展示などを、行政と連携して積極的におこなってきた。

同館の所轄部署は十和田市の商工観光課(観光振興)である。文化庁からの「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の施行について」や、それに基づく各美術館へのアンケート調査等は同市の教育委員会に最初に届く。同館運営には市教育委員会との関係づくりも欠かせない。

なお、2014年10月4日から19日まで「ポコラート宣言2014十和田展」と題し、東京都千代田区とアーツ千代田3331の障害者アート支援事業として始まった「ポコラート公募」展(2014年10月から2015年1月まで)の出品作品4820作品・2292人の中から選出された54名の障害がある創作者による作品展を全国三か所(青森、秋田、高知)の巡回展の一つとして実施した。これ以外

に、障害者等の創作が中心となる展覧会は行っていない。

### 4. 百瀬文「口を寄せる」展の鑑賞ツール

2022年12月10日から2023年6月4日まで、企画展「百瀬文 口を寄せる」を開催した。見留さんが担当した。現代美術家の百瀬文は、「コミュニケーションのなかで生じる不均衡をテーマに、セクシャリティやジェンダーの問題を鋭くとらえ、作品を制作する」[見留:2022]アーティストである。2013年のデビュー作《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》は、聴覚障害のある木下さんと百瀬が対談する映像作品である。十和田では、《声優のためのエチュード》を新制作した。【図18-2】同作品について見留さんは以下のように描写している。

「百瀬が初めて制作したサウンドインсталレーションで、「声」をテーマにしている。鑑賞者は真っ暗な会場の中に入るが、前もあまり見えず、自分がどこに向かうかわからないまま、手探りで前にすすんでいく。声の流れる方へと足を運ぶと、声と連動して電球の光が揺らいでいる。目が慣れると声を取録する録音室のような空間にいることに気づき、壁際にあるベンチに腰をかけて作品を鑑賞する。鑑賞者は声を聞き明かりを見ながら、思い思いの映像や人物を「見る」ことになる。「声」は、一人の声優が少年から女性へと声色を変えて同じセリフを繰り返すものである。声優の声色が変化するなかで、特定のジェ

ンダーを想定できない瞬間や、身体が見えないゆえに、声で身体を補うように過剰にジェンダーを演じているように聞こえる瞬間がある。」[見留2023:113]

耳の聞こえない方に、この作品をどう鑑賞してもらおうのが良いのだろうか。見留さんとエディタは、ちょうど来館した、耳の聞こえないアートナビゲーターの小笠原進也さんに、鑑賞ツールについて相談した。「作品自体が何を伝えたいのか、そこで、それに近づくためにどういうものが必要か」と考えればよいとのアドバイスを得た。そこで耳の聞こえない人のための鑑賞ツールに「こういう部屋にはこういうものがあります、これにはこういう声が聴こえていま

す」と記すこととした。

耳の聞こえない方にも利用しやすい鑑賞ツールができた。しかし、この展覧会では実際に耳の聞こえない方たちからのフィードバックをもらう機会をつくることはできなかった。

### 5. 百瀬文「口を寄せる」展の企画理由と耳の聞こえない方とのつながり

見留さんが、百瀬さんをアーティストとして企画展に招いた理由の一つに、十和田市と周辺地域に強く残る家父長制の雰囲気がある。百瀬さんの作品には、「家族」とは異なる人と人とのつながりのあり方が示され



【図18-2】百瀬文《声優のためのエチュード》2022、会場風景

ているともいえる。「一個人の中にも複雑な属性があるように、自己と他者の関係性は誤読も誤解も生じる。複雑なままを整理せず、区別しない状況を見せたかった。」との思いがあったという。結果的に、これまで同館に来ることがほとんどなかった、聴覚障害者とのつながりもつくることができた。

展覧会会期中に行った百瀬文の映像作品上映会のトークでは手話通訳をつけた。同館は音が反響しやすい建築である。どんなに大きな声を出しても聞こえづらいことも少なくない。百瀬さんの作品においては、音を使う作品であったため、壁と天井の反響を考慮しなければならなかった。壁材を工夫することで、音がかなりクリアになった。

展覧会には、作品に登場する、耳の聞こえない木下さんも来館した。鑑賞に同行した見留さんは、《声優のためのエチュード》という音の作品においては、木下さんが他の鑑賞者の動きを見ながら、作品を見ていることに気づかされた。さらに、前述の音が響かないための吸音材などに意識を向けていた。短時間ではあったが、声は出さずにUDトークと一緒に鑑賞した見留さんは「とても良い鑑賞経験」との印象を抱いた。

## 6. 地域へ + 聴覚に障害がある方との鑑賞会

同館は設立経緯から観光客をターゲットとしてきたが、同時に「身近な地元のアksesしにくい人たちに向けての視点を考えなきゃいけない」と、見留さんはエドゥケーターと常日頃から話していたという。しかし、やりたい気持ちはあっても、新たな活

動を行うには時間的余裕が充分とはいえない。現在、街中には、番地から「14-54」と名付けられた分室があり、ライブラリースペースとしても機能し、展示にも使用している。分室の活動が軌道にのるように、サポーターもうごいている。今後の展開の糸口になる可能性がある。

同館周辺にある屋外彫刻を、近所の幼稚園児が見に来ることも少なくない。生まれて初めて触れる作品が現代美術であることは、将来どのように影響するのだろうか、長期的な期待ももてる。

百瀬展をきっかけに生まれた手話通訳と連携し「聴覚障害者のためのギャラリートーク」を夜間開催する試みもはじめた。見留さんによると、参加者は15名、初めて美術館に来た人や、これまで来館したことがある方など、作品鑑賞の経験が異なる方々。1つの作品を40分以上かけて、質問や手話のおしゃべりも交えて鑑賞したので、作品に関していろいろな気づきが多いようであったとのこと。企画者としては、参加15名よりも少ない5名から7名程度の鑑賞会も試し、落ち着いて鑑賞できる最適人数を考えてみたいとのこと。また、当初はUDトークの使用も考えたが、結果的に、手話通訳に入ってもらったことで作品鑑賞の視線の動きも楽であったとの感想があり、手話通訳の必要性を感じた。今後、定期開催も視野に入れ、他館の事例も学んでいきたいとのことであった。

### 【感想】

訪問時、多くの観光客が来館し、また野外彫刻を幼稚園の子ども達が眺めていた。館内の彫刻は触ってもよいもの、よじ登るものもあり体感的で予備知識がなくとも楽しめた。一方で少し難解とも思える現代美術の企画展を通して地域の障害がある方々と共に鑑賞する機会がつけられつつあり興味深かった。

(注 18-1)

文化庁文化観光推進法に基づき認定した拠点計画及び地域計画 ([https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/bunkakanko/92441401.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/92441401.html)) にある

十和田市現代美術館を中核とした十和田市文化観光推進拠点計画(十和田市)を参照した。

(注 18-2)

訪問時の企画展「劉健華中空を注ぐ」のアーティストは上海出身であり、展示のハンドアウトには、中国語簡体字と繁体字と日本語と英語の4種類を使用していた。

### 【調査概要】

実施日：2023年11月9日(木)

場所：十和田市現代美術館 休憩スペース

### 【調査対象者】

見留さやか(みとめさやか)

十和田市現代美術館キュレーター。2020年までキュレーターとエドゥケーターを兼務。地中美術館に勤め、その後トータルメディア開発研究所を経て、2016年より現職。主な近年の企画に「名和晃平 生成する表皮」(2022)、「百瀬文 口を寄せる」(2022)、「劉建華 中空を注ぐ」(2023)など。

豊川大樹(とよかわひろき)

十和田市現代美術館管理運営統括。2009年より十和田市現代美術館に勤務。展示設計、インストーラー、広報、運営を経て現職。

### 【参考資料】

2020『十和田市現代美術館 活動記録』十和田市現代美術館

2020『十和田市現代美術館 作品集』十和田市美術館

2020『十和田市現代美術館を中核とした十和田市文化観光推進拠点計画』

百瀬文,2023『百瀬文 口を寄せる』美術出版社

# 一宮市 三岸節子 記念美術館

住宅街に溶け込む、赤レンガづくりの鋸屋根を持つ建物が一宮市三岸節子記念美術館である。道路から駐車場、さらに美術館の玄関近くまでが平坦で、自動車でのアクセスがスムーズである。学芸員の野田路子さん（以降、野田さん）にお話をうかがった。

## 1. 小規模ミュージアム

一宮市三岸節子記念美術館は、同地出身の画家三岸節子を顕彰する美術館として、画家の生家跡に建設された。1998年に尾西市三岸節子記念美術館として開館し、2005年の市町村合併に伴い、一宮市三岸節子記念美術館となった。現在、三岸節子の代表作等約100点をはじめとする関連資料・作品を所蔵する同館は、日本の女性洋画家の草分けである三岸の研究に欠かせない存在である。美術館では三岸の作品に関わる常設展とともに、関連する特別展や講演会、ワークショップ、コンサートの開催、展示室の市民への貸し出しなども行っている。

現在の運営体制は、学芸員4名（うち2人が常勤の正職員で、残り2人が会計年度任用職員）である。教育普及の専任者はいない。

同館は一般社団法人全国美術館会議の「小規模館研究部会」に参加する小規模館であるという。小規模館とは、「建物や予算の規模、あるいは収蔵品やスタッフの数などにおいて、自らが小規模」と自認する美術

館・博物館」であり、同会議の他の研究部会と違い「個人ではなく館単位で加盟」であり、「加盟館には作家の個人名を冠した美術館が多い」とのことである。

## 2. 『さわるアートブック』の連携館

一宮市は愛知県内にある。『さわるアートブック』は、愛知県美術館が中心となり、県内9つの美術館が連携して作成した点字と触図による各館のコレクションの鑑賞ガイドである。文化庁の補助金（平成24年度文化庁文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業及び平成25年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）を活用し、①②の2巻において合計17作品を紹介する「アートブック」を発行している。また本の発行のみでなく「晴眼者向けPDF(pdf)」「作品触図・解説点字PDF(pdf)」「作品解説読み上げ音声(wmv)」「作品解説点字データ(base)」「各所蔵館情報(pdf)」があり、愛知県美術館のホームページではPDFデータを誰でも無償でダウンロードすることができる。（注13-1）

同館学芸員の野田さんは、このアートブックに直接かかわっていないが、学生時代に愛知県美術館でインターンを経験した。その際に同館の「視覚に障がいのある方を対象とした鑑賞会」にも参加、その後も関係がゆるやかに続いており同館の「出張授業アーティスト・イン・スクール」の名古屋盲学校訪問にスタッフとして参加するなど、視覚に障害がある方を対象にした美術鑑賞に関わる機会がある。

## 3. 障害がある方たちの展覧会と鑑賞の受け入れ

館展示室の貸し出しは市民にひらかれており、水彩画の同好会や、写真クラブの発表の場ともなっている。その中には、障害福祉事業所が取り組んできた水彩画などの創作絵画発表も、コロナ禍前はほぼ毎年行われていた。

同館は一宮市内在住の65歳以上、また身体障害者手帳・戦傷病者手帳・精神障害者保健福祉手帳・療育手帳を持参の方（ミライロID可）及び付き添い1名は無料観覧できる。（注19-2）また、団体鑑賞の方の中に、車椅子の方や白杖を持つ視覚に障害がある方を見かけることもある。野田さんによると、そのような方たちと直接言葉を交わす機会はほとんど無かったが、最近、来館した視覚に障害がある方から「仲間も連れて来たいんだけど」との申し出があった。個人情報などの詳細を尋ねなかったが、「ぜひ来てください」との思いを伝え、連絡待ちであるという。

夏休みには、放課後等デイサービスの子どもたちが来館することがある。事前に日時の連絡があり、引率者より「案内はいりません」とのこともあり、館としても見守りをするのみである。来館時に、障害などの理由で、思わず大きな声を出してしまう子どももいる。その日に居合わせた一般観覧者より「静かに見たかった」との苦情がアンケートに書かれていることもあった。今日的な博物館の在り方を研修で学び「誰でもアクセスできる美術館としなければならない」との思いがあり、どの方も美術館

住所 愛知県一宮市小信中島字郷南  
3147-1 ☎ 494-007  
電話 0586-63-1892  
ファックス 0586-63-2893  
URL <https://s-migishi.com/>

で快く鑑賞してもらえるよう、今後の改善策を考えている。

なお、同館は、玄関口の近くで車を止めて降りられる環境がある。また、駐車場からの点字ブロックも敷設している。

#### 4. 授乳室設置と赤ちゃん鑑賞会

同館には子ども向けのパンフレットがある。三岸節子を漫画風に描いたイラストが前面につかわれており、子どもの美術館での過ごし方について、声高に注意するのではなく、パンフレットを読んでもらうために用意したとのこと

また、一階エントランスのコインロッカーコーナーの奥に、簡易的だが常設の授乳室がある。これまで授乳室をつかいたいとの要望があった場合、そのたびごとに館長室などを案内していた。館内で「設置した方がよい」となり、現時点では、鍵もなく、お湯も出ず、中途半端な状態ではあるものの、限られた予算内で仮設的に設置したという。

月一回のコレクション展ガイドツアーとは別に、「赤ちゃん&子どもアート鑑賞会」に、2021度より毎年取り組んでいる。そもそものきっかけは、野田さん自身が他館に子連れで行った際に、絵に近づきすぎて怒られ、悲しく感じた経験からである。赤ちゃん連れでも、小さな子ども連れでも来館できる美術館であればとの思いが生まれた。子育て経験があるパート職員からの応援もあった。講師にNPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事の富田めぐみさんを招き、0歳から小学生のお子

様とその保護者（保護者一人につきお子様2名まで）を各回5組、10名程度で、参加無料（保護者の観覧料のみ必要）である。一宮市内からの参加が多いが、名古屋からの参加もある。

内容は、約1時間。最初に別室で保護者向けの講義がある。床面にシートを敷き子どもはそこに寝転がってもいい。鑑賞前の講義内容は、美術作品に関するものではなく、赤ちゃんや子どもの様子をよく見ましようというものである。その後、展示室に入り、赤ちゃんや子どもとともに鑑賞する。展示室内では、個々の様子と発達、作家、作品についての対話と解説がある。

一般鑑賞者も展示室にいるため、開催日時をホームページで告知するとともに、「騒がしくなることもあります」と張り紙をする。終了後に参加者以外から「いい取り組みをしてますね」との声をかけられたこともあった。

最初は1日に2回であったが、希望者も多いことから、今年度から1日3回実施している。赤ちゃんの体調も考慮し、朝の早い時刻も含め、午前2回、午後1回の開催である。【図19-1】

野田さんは「赤ちゃんが絵を見ている」という。そして笑ったり、お母さんの顔も見たりしているという。直接的に美術教育になっていると言い切れるかどうかはまだわからないが、1つの美術体験としてあってもいいだろうと、思うとのことであった。



【図19-1】「赤ちゃん&子どもアート鑑賞会」の様子

#### 5. 北海道とのネットワーク

同館は北海道立三岸好太郎美術館のパートナー館である。三岸好太郎は北海道出身で、三岸節子の若くして急逝した夫である。これら二館は、日本で唯一公立美術館に夫婦の名前がそれぞれについている館でもある。北海道立三岸好太郎美術館は1967年開館。三岸好太郎の作品の多くは三岸節子が収集し同館に寄贈した。

2023年秋、一宮市三岸節子記念美術館では「アイヌ工芸品展 AINU ART—モレウのうた」展が開催された。アイヌ文様の伝統を受け継いだ現代的な表現と、先人たちがのこした木工芸・染織の優品が展示された同展は、三岸好太郎美術館のパートナー館がある北海道とのネットワークにより開催されたという。同展には、北海道の土産物

として有名な木彫り熊と尾張徳川家の関係についてのトピック展示もあった。

#### 6. 画家制作時の年齢をキャプションに書くことで

1905年生まれの画家・三岸節子は享年94歳、1999年に亡くなった。死の間際まで絵の制作に取り組んでいたといわれている。同館の展示の特徴的の一つに、三岸作品のキャプションに、制作時の画家の年齢を記していることがある。

最晩年の《さいたさいたさくらがさいた》は130cm×160cmの大作で、93歳のときに描いている。ギャラリートークを通して、野田さんは、鑑賞者の「93歳で、こんな大きな絵を！」との驚きや、63歳でフランス

に移住したことを知り「これくらいの歳になってもいろんなことができるわね」とのポジティブな反応の声を聞く機会があるという。現在のところ高齢者向けのプログラムを特別に設けてはいないが、高齢者をエンパワメントさせる要素が、三岸節子の常設展示にはある。【図 19-2】

【感想】

地域に根差す小規模館が、広域自治体の公立美術館と、視覚に障害がある方へのプログラムを通してゆるやかに連携する具体事例を知ることができた。また作品鑑賞を通して画家・三岸節子の人生にエンパワメントされるという、鑑賞の可能性のひろがり気づかされた。

(注 19-1)

『さわるアートブック』の詳細とダウンロードについては、愛知県美術館ホームページ「視覚に障がいのある方へのプログラム」を参照ください。

(<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/education/disabilities-program.html>)

(注 9-2)

ミライロ ID とは、障害のある人に向けたスマホ用アプリ、デジタル障害者手帳のこと。

【調査概要】

実施日：2023年11月30日（木）

場所：一宮市三岸節子記念美術館 館長室

【調査対象者】

野田路子（のだみちこ）

一宮市三岸節子記念美術館学芸員。かすがい市民文化財団、あいちトリエンナーレ 2010 実行委員会事務局などを経て 2017 年より現職。近現代美術と教育普及を専門とする。「なかやみわ 絵本の世界展」（2018）、「墨は流すもの—丸木位里の宇宙—」（2020）、「安藤正子展 ゆくかは」（2023）などを担当。

【参考資料】

2017『三岸節子 所蔵作品集』一宮市三岸節子記念美術館

愛知県美術館ホームページ 視覚に障がいのある方へのプログラム

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/education/disabilities-program.html>

ICHINOMIYA CITY MEMORIAL ART MUSEUM OF SETSUKO MIGISHI

コレクション展(常設展)

モチーフを求めて

会期：2023年9月16日(土)～11月19日(日)



展示目録

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	自画像	1924(大正13)	19歳	32.5×23.5	3F	油彩・キャンバス
2	三岸好太郎「貝」	1934(昭和9)		27.0×24.0	20F	グアッシュ・色紙
3	三岸好太郎「海」	1933(昭和8)		32.0×41.0	6F	油彩・キャンバス
4	もや	1937(昭和12)	32歳	60.0×72.5	20F	油彩・キャンバス
5	群がる馬	1938(昭和13)	33歳	162.0×130.0	100F	油彩・キャンバス
6	花	1950～60年代		53.0×45.5	10F	油彩・キャンバス
7	アンダーソンの壺と小鳥	1951(昭和26)	46歳	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
8	花と魚	1952(昭和27)	47歳	65.1×90.9	30F	油彩・キャンバス
9	鳥と琴を弾く埴輪	1957(昭和32)	52歳	97.0×130.3	60F	油彩・キャンバス
10	インカの壺	1956(昭和31)	51歳	80.3×53.0	25M	油彩・キャンバス
11	静物	1958(昭和33)	53歳	65.0×80.5	25F	油彩・キャンバス
12	火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)	1960(昭和35)	55歳	72.7×60.6	30F	油彩・キャンバス
13	小運河の家(1)	1972(昭和47)	67歳	100.0×81.0	40F	油彩・キャンバス
14	スペインの白い町	1972(昭和47)	67歳	72.5×60.0	20F	油彩・キャンバス
15	赤い地図	1980(昭和55)	75歳	100.5×81.5	40F	油彩・キャンバス
16	ブルゴーニュの麦畑	1978(昭和53)	73歳	92.0×65.0	30F	油彩・キャンバス
17	トネールの白い川	1980(昭和55)	75歳	130.3×97.0	60F	油彩・キャンバス
18	作品 I	1985(昭和60)	80歳	65.0×100.0	40M	油彩・キャンバス
19	小さな町(アンダルシア)	1987(昭和62)	82歳	89.0×116.0	50F	油彩・キャンバス
20	崖の上(アンダルシアの)	1987(昭和62)	82歳	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス
21	アンダルシアの坂道	1987(昭和62)	82歳	100.0×65.0	40M	油彩・キャンバス
22	作品 II	1988(昭和63)	83歳	72.6×91.7	30F	油彩・キャンバス
23	城のある町	1988(昭和63)	83歳	120.0×120.0	50S	油彩・キャンバス
24	アルカディアの赤い屋根(ガチスにて)	1988(昭和63)	83歳	60.0×73.0	20F	油彩・キャンバス
25	作品 II	1991(平成3)	86歳	116.7×90.9	50F	油彩・キャンバス
26	ブルゴーニュの一本の木	1995(平成7)	90歳	162.1×130.3	100F	油彩・キャンバス
27	自筆原稿「北国の歌」5枚	『花より花らしく』(1977年・求龍堂)掲載				

1 10 15 26 高輪画廊所蔵 3 新収蔵品

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録のNoは作品の並びと異なります。

一宮市三岸節子記念美術館 〒494-0007 愛知県一宮市小信中島字郷南3147-1 電話:0586-63-2892 <https://s-migishi.com>

【図 19-2】 常設展の展示目録にも、制作時の作家の年齢が書かれている。

# 広島市 現代美術館

市街地にある緑豊かな丘の上に、大理石やタイル、アルミ等でできた広島市現代美術館がある。学芸員の笹野摩耶さん（以降、笹野さん）、総務担当の伊藤悦子さん（以降、伊藤さん）にお話をうかがった。

## 1. 公立館初の現代美術専門美術館

広島市現代美術館は、1980年に広島市文化懇話会「広島の文化都市像を求めて」提言の一つとして「文化都市ヒロシマのシンボルとして 現代美術館の設置」が提唱され、1985年に基本計画が作成され、1989年5月3日に、公立館初の現代美術専門美術館として開館した。黒川紀章が建築を手掛け、自然石、磨き石、タイル、アルミと過去から未来への時間の流れを表すように変化する素材が使われている。

同館は現在、指定管理者である公益財団法人広島市文化財団が指定管理期間5年で運営しており、運営体制は、職員が18名、うち学芸員は9名（館長、副館長含む）である。

2020年12月から改修工事の為休館し、2023年3月にリニューアルオープンした。今年度集計は、まだ出てないが、伊藤さんによると、休館前と比較して観覧者数の伸びに確かな手ごたえを感じているという。

住所 広島市南区比治山公園 1-1  
〒732-0815  
電話 082-264-1121  
ファックス 082-264-1198  
URL <https://www.hiroshima-moca.jp/>

## 2. 改修工事による展示室内エレベーター設置

改修工事により、同館のアクセシビリティで向上したことは、エレベーターが設置されていなかった展示室にエレベーターが設置されたことだそう。改修前は、展示室外のエレベーターを使ってもらわざるを得ず、鑑賞の導線が無視した案内にならざるをえなかった。しかし展示室内にエレベーターが設置されたことにより、車椅子ユーザーをはじめとする階段利用が困難な方々への展示会の導線に沿った案内が可能になった。また多目的トイレやベビーケアルーム（授乳室）、キッズスペースも新たに設置した。

ソフト面では、作品解説アプリ「ポケット学芸員」（注 20-1）を、コレクションの作品解説に導入。多言語対応、聴覚障害者や視覚障害者への対応ともなる。本人のスマートフォンで無料使用でき、希望者にはタブレットを貸し出す。【図 20-1】館内はフリー Wi-Fi 環境である。



【図 20-1】ポケット学芸員の使用例

これらアクセシビリティの向上が理由だと断言はできないが、リニューアルオープン3万人目は視覚障害のある来館者だった。

## 3. コレクション展示の高さのセンターを低く、子どもにも見やすく

同館のエントランスの窓側に、子どもが座るサイズの椅子や机が並べられた「多目的スペース「モカモカ」」がある。「モカ」とは同館の略称「Hiroshima MOCA」に由来する。この椅子や机は木製で、子どもに限らず、誰でも自由に使い、動かすことができる。週末にはワークショップにも使われている。入館した人々は最初にこの、子どもサイズの椅子に表れるような、子ども歓迎のゆるやかな雰囲気の多目的スペース「モカモカ」を見ることになる。

リニューアル後の展示方針として、現在とは異なる展示室で行っていたコレクション展をエントランスに近い展示室に変更した。調査時に開催されていたコレクション展は、教育普及も担当する学芸員の笹野さんが担当した。これまで、作品のセンター位置を床面から150～155cm程度とすることが多かったが、リニューアル後のコレクション展では、全体的に140cmぐらいとした。大人が立っていても、子どもが立っていても、座っていても、比較の見やすい位置だという。それに伴いキャプションの位置も低くした。（注 20-2）

#### 4. アートナビゲーターとともに研修機会創出

同館の鑑賞案内は、専門スタッフのアートナビゲーターが担当している。同館に常駐し、会場で作品鑑賞を見守り、展示解説を求められれば対応する。アートナビゲーターによる団体向けの鑑賞プログラムも無償で提供している。原則、事前予約制で、学校、高齢者や障害者グループや一般団体など広く対応している。

リニューアルオープン時に着任するアートナビゲーターを対象にした館主催の2週間の事前研修会では、その一部に障害がある方への鑑賞サポートを学ぶ機会を設けた。「手話研修」では広島県聴覚障害者センターから講師を招き、座学と筆談体験をした。広島市視覚障害者情報センターに来ていただいた研修では、ペアの一方が視覚をつかわず白杖をつかって歩き、もう一方がサポートする体験をした。さらに、劇場アクセシビリティの研究者である九州大学准教授の長津結一郎さんを招き、「美術館がアクセシビリティの向上を、どうしたら、自分たちでできるか」という、グループディスカッションを取り入れたワークショップも行った。アクセシビリティにかかること以外に、鑑賞ツアーの組み立て方も学ぶ研修会の内容は、笹野さんと、同館広報担当者が決めた。研修の一つ、あいサポート研修に講師依頼をした車椅子の対応については、アートナビゲーターだけでなく、事務室にいる学芸員や総務スタッフも学んだ。このようにハード面の改修だけではカバーできないことについて、一緒に考えるきっかけづくりを、

笹野さん達は意識したという。

実際の現場では、例えば聴覚障害がある生徒たちが来館した際、アートナビゲーターは、視覚的にわかりやすい簡単な説明を書いたパネル、筆談キッドを用意し、案内時もゆっくり区切りながら話すなど、できる範囲の対応などが行われているという。

リニューアルオープンに向けて実施した研修だったが、実践的であり、モチベーションにもつながるので、少なくとも一年に一度は行うよう、笹野さん、伊藤さんらで計画をはじめている。

#### 5. 対話しながら見る、いどばた鑑賞会

広島市現代美術館の鑑賞サポートは、前述のアートナビゲーターが常駐していることが最大の特徴であるが、プログラムとしては現在3つが定期的に開催されている。一点目は「アートナビ・ツアー」、土曜日、日曜日、祝日の午前と午後に開催、二点目は「いどばた鑑賞会」これは「アートナビ・ツアー」の第一日曜日がそれとなり、三つ目は「ベビーカー アートナビ・ツアー」で毎週水曜の午前に開催される。

ここでは、障害者等による文化芸術活動に関りが深いと思われる「いどばた鑑賞会」を詳しく見て行こう。なぜ関りが深いかというと「展示会場でおしゃべりをしてもいい」ということが前提になっている鑑賞プログラムであることは、声を出さずに鑑賞することが難しいこともある障害がある人や子どもなどの美術鑑賞を肯定するからである。

「いどばた鑑賞会」は、いわゆる対話型鑑賞の一つで「みんなでしゃべりながら、作品を見ましよう」という、「作品を見ながらおしゃべりする」会であるが、「展示室って、なかなかはなしづらい」という先入観を解消するためでもあると、笹野さんは述べる。

美術館で、しゃべってはいけないという先入観は「小さいお子さん連れの方とか、ちょっと声が抜けちゃう方とかが、来づらくなってしまふ」ことにつながる。声を出してもいい、どのような方も来ていい美術館であることを「積極的に私たちがしゃべってみたら、伝わるかなあ」との思いが、「いどばた鑑賞会」の開催に込められているそうだ。笹野さんは「現代美術って難しいっ

て思われがちです。作品背景や文脈を知ることが大事ですが、一方で、作品を見て、自分がどう感じるかも大事です。」と述べる。そして、そのような鑑賞は「いろんな意見が受け入れられる機会ともなる」という。正解があるのではなく「自由な発言が出来る場所に、美術館はなるべきだ」との思いがあり、そのことを実現するための「いどばた鑑賞会」を始めたとのことであった。

初めは「おしゃべりして鑑賞をするなんて、どういうことだ」と、苦情が来るのではないかと思っていたが、現時点での苦情はない。それどころか、参加者でなくとも、展示室に居合わせた鑑賞者が「いどばた鑑賞会」を見ていたり、聞いていたりする場合せえあるという。参加者からも、作品や



【図 20-2】対話しながら見る、いどばた鑑賞会の実施風景

展覧会の「みかた」が変わっていくことが面白いなど、好意的な意見も多い。

「いどばた鑑賞会」は、学芸員の笹野さんが担当することもあるが、基本的にアートナビゲーターが担当する。その際の「おしゃべり」については、参加者が安全な立場で発言できることが大事なポイントともなる。**【図 20-2】**

## 6. 地区・地域連携

市内の学校からの美術館見学も少なくない。広島市内の小中学校等を対象に、鑑賞バスで美術館に招待する「美術館利用促進バス事業」を行っている。

また、改修のための休館中に館内活動が出来なかったため、市内各所にサテライト会場を設け、展覧会やアートプロジェクトを行ったことで、市内にさまざまな関係が構築された。広島市現代美術館は小高い山の頂上にあるため、立地的に館外とのつながりがつくりにくい。しかし休館中の館外活動は、つながりをひろげる結果となったという。

館外での展示活動の一つに、学校での所蔵作品の展示とレクチャーや鑑賞ワークショップがあり、例えば、アーティストの岡本敦生の作品《CRUSIT（地殻）-9》（1993）、《CRUST-cocoon 97-2》（1997）などの鑑賞を通して、美術館側と学校側では「同じように子ども達に美術を伝えたい」と思っている、視点が異なることに気づかされた。学校では指導要領に沿って鑑賞が行われる。一方で、教員の中には、美術館の所蔵作品を活用した鑑賞の授業や、作

品制作の授業を独自に行う方もいた。

標高70メートルの小高い「比治山」頂上にあることは館外とつながりにくい側面もあるが、一方で、「比治山公園」一帯の自然と文化施設を活かす市の計画の中での美術館への期待もある。現在、ふもとのバス停から動く歩道とエスカレーターで登った公園入口まで点示ブロックが敷設されている。それが、今後、延長され、美術館とその先のまんが図書館までつながる予定だ。また、美術館の向かいにある「ムーアの広場」につながる急斜面にはスロープ開設が予定されている。広島市内や瀬戸内海を一望できる展望台がある比治山公園は、同館と「広島市まんが図書館」の文化施設がある賑わいの場への期待があり、その中で美術館にかかるアクセシビリティが整えられていく機運もあるだろう。

また、現在、指定管理者である財団は、市内の音楽ホールなどの文化施設や、公民館などのコミュニティスペースの運営も手掛けており、地域連携の可能性はさまざまにあるといえるようだ。

## 7. 30年の中での障害者等の文化芸術活動にかかわること

現代美術を専門とする公立館として、障害者等の文化芸術を中心に据えた展覧会企画を行ってはいないが、開館以来三十数年にわたり多数の展覧会を開催する中で、それらに通じる企画展示もあったようだ。

例えば、「解剖と変容：プルニー & ゼマーン・コヴァー チェコ、アール・ブリュット

の巨匠」（2012年5月26日（土）—7月16日（月））では、パリのabcdコレクションから、チェコのアウトサイダー・アート／アール・ブリュットを代表する作家二人の作品を紹介した。「見るための冒険—ミュージアム・アドベンチャーの活動から—」（2004年10月23日（土）—2005年1月23日（日））では、展覧会会場で、様々な見方を体験し、それぞれに感じたり、考えたりすることができるようなしかけとともに作品を展示し、また、アーティスト栗林隆による新作インスタレーションも展示した。視覚障害者を対象とした内容ではないが、触れる作品など、視覚による鑑賞のみに頼らない展覧会であったという。また「シェルター×サバイバル —ファンタスティックに生き抜くための「もうひとつの家」—」（2008年2月16日（土）—4月13日（日））では、ホームレスでアーティストのいちむらみさこと小川てつおが参加しており、経済的に困難な状況にある人々につながる表現もあつまっている。さらに「被爆70周年 ヒロシマを見つめる三部作 第1部ライフ=ワーク」（2015年7月18日（土）—9月27日（日））では、専門的な美術教育を受けていない表現者の絵といえる、広島市の被爆者たちがその体験をもとに描いた「原爆の絵」（広島平和記念資料館蔵）も展示している。

なお、第二次大戦中に人類初めての核攻撃を受け、現在「国際平和文化都市」を掲げる広島市の独自の施策として、市内の他の公立施設と同じく、広島市現代美術館は、原爆障害者章を提示した場合は、身体障害者手帳を持つ方と同じくコレクション展の観覧が無料となる。

### 【感想】

調査者の訪問時、若林奮による大きな鉄の彫刻《DOME》を囲むように小学生たち数十名が床に座りアートナビゲーターの話聞いていた。欧米の美術館では時折、見かける情景だが、日本の美術館では、大勢の子どもが座り込んで鑑賞している風景をほとんど見かけない。日本の他の美術館空間には余裕がないからかもしれないと気づかされた。

(注 20-1)

「ポケット学芸員」は、学芸員による解説文やナレーションを鑑賞者自身のスマートフォンで楽しめる無料アプリ。ポケット学芸員のホームページによると公立私立問わず日本の美術館・博物館等で172館で導入されているとある。(https://welcome.mapps.ne.jp/pocket/、2024年2月4日閲覧)一度アプリをダウンロードすれば導入しているどの館でも使うことができる。

(注 20-2)

調査者が訪問した時、子どもたちが絵画作品を覗き込むように鑑賞していた。子どもは通常は見上げるような鑑賞姿勢していることが多いが、ここでは違っていたので印象に残った。

【調査概要】

実施日：2023年12月1日（金）

場所：広島市現代美術館

多目的スペース「モカモカ」

【調査対象者】

笹野摩耶（ささのまや）

広島市現代美術館学芸員。2017年より現職。教育普及と展覧会を担当する。担当した展覧会に「丸木位里・俊 - 《原爆の図》をよむ」（2018年）、「夏のオープンラボ：タイルとホコラとツーリズム season6 《もうひとつの広島（フィールド・オブ・ドリームス）》」（2019年）、「コレクション2023 II コレクション・ハイライト + コレクション・リレーションズ [ゲスト・アーティスト：小森はるか + 瀬尾夏美]」（2023-24年）など。

伊藤悦子（いとうえつこ）

広島市現代美術館総務担当。（公財）広島市文化財団の職員として、広島市の文化施設等で施設管理や文化事業を担当し2023年4月より現職。美術館では管理運営や利用者サービス等を担当。

【参考資料】

ウェブ版美術手帖 NEWS 2023年3月19日「広島市現代美術館が開館以来初の大規模リニューアル。変わったものと、それでも変わらないもの」

<https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/26929>

ポケット学芸員 NEWS No.88 ,2023年4月21日「ミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」が広島市現代美術館に導入されました」

<https://www.waseda.co.jp/news-release/88>

令和5年度 障害者等による文化芸術活動推進事業  
公立美術館における障害者等による  
文化芸術活動を促進させるための  
コア人材形成を軸とした  
基盤づくり事業リサーチチーム

#### プロフィール

中川真（なかがわしん）

音楽学者。大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授。ガムラン合奏団《マルガサリ》創設者。著書に『平安京 音の宇宙』（1992年）、『サウンドアートのトボス』（2007年）、『アートの力』（2013年）など、編著に『これからのアートマネジメント』（2011年）、『受容と回復のアート』（2021年）、『Voices from A』（2022年）など。京都府文化賞、サントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、日本都市計画家協会賞特別賞、京都市芸術振興賞などを受賞。

中西美穂（なかにしみほ）

関西を拠点に文化芸術のフィールドワークを行う。またアートNPOや文化政策の実務経験を活かし、非営利団体等への運営アドバイスも行っている。京都精華大学美術学部卒業、大阪大学大学院文学研究科文化形態論博士後期課程修了、博士（文学）。大阪人間科学大学非常勤講師、元大阪アーツカウンシル統括責任者。美術館に関わる論文に「参加型〈裁縫〉アートの一事例：「アジアをつなぐ」展参加作品《HOUSE OF COMFORT》のワークショップを中心に」2017, 国際日本学研究会『文化 / 批評』。

令和5年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための  
コア人材形成を軸とした基盤づくり事業

主催：文化庁・一般社団法人 HAPS

令和5年度

障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるための  
コア人材形成を軸とした基盤づくり事業：リサーチ報告書

発行日	2024年3月31日
発行元	一般社団法人 HAPS
執筆	中西美穂、中川眞
編集	中西美穂、一般社団法人 HAPS
アートディレクション、デザイン	山本洋明
リサーチチーム	中川眞、中西美穂

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。

# HAPS

一般社団法人 HAPS

京都市東山区大和大路通り五条上る山崎町 339

TEL 075-525-7525 | FAX 075-525-7522

[haps-kyoto.com](http://haps-kyoto.com)